

アイヌ自製品の研究—仕掛け弓・罌—

宇田川 洋

はじめに

筆者は、以前に「アイヌ自製品の研究—矢尻—」という論文を発表したことがある（宇田川 1994）。北方地域に広がる諸族のいわゆる民族資料と考古資料を検討した結果、北海道アイヌに特徴的な「毒窩」と呼ばれる溝を矢尻に彫り込むタイプは、考古資料・民族資料ともに、石川元助のいう「トリカブト毒矢文化圏」の中でも「東北アジア海岸文化圏」と重なるようであると結論した。つまり、アイヌの所属は不明であるが、旧アジア諸語系の「古アジア族」の広がりともいえるのである。

その資料集めの段階から、並行して仕掛け弓等の資料を収集していたが、同じ「獲物を獲る」という作業であるにもかかわらず、どうやら異なる分布を示しているということが分かってきた。今回はそれらの資料を検討してみることにするが、残念ながら、考古資料は今のところ発見されていないようである。

安斎正人・佐藤宏之は、東北地方岩手県沢内村でのマタギの罌猟調査を継続して行っている（安斎・佐藤 1993）。アキビラと呼ばれる小動物を丸太で押し潰す仕掛けをもつ罌などとその狩猟活動を調査し、氏等のいう「土俗考古学」を推し進めようとするものである。そして「罌猟に関する民族誌の記載は膨大であるが、ほとんど全て単独の罌本体の見聞録か記載に終始し、その罌が使われた実際のコンテクストが不明な資料が大多数を占めている。従って、各民族毎の狩猟や罌に関する報告例を集成しても、タイプ・リスト的な運用が一般的であった。しかしながら、先史時代のような考古学的過去の生活と技術およびその背後の生態的・社会的検討を先史狩猟採集民による適応形態の説明・解釈にまで推し進めていくためには、今回調査・報告したような場のコンテクストが具体的に検討可能な土俗（民族）考古学的実例の蓄積が必要と考えられる」とも述べている（佐藤・安斎 1995：44）。

ところで、本論の作成中に大変参考になる論文が発表された。それは出利葉浩司によるもので、とくに罌・仕掛け弓の比較検討を通しての北海道アイヌおよび東北アジア諸族の小型毛皮獣狩猟活動の意味を考察したものである（出利葉 1995）。そして研究史の整理を行い、アイヌの狩猟は「キツネやテン、カワウソなどの小型毛皮獣に力点がおかれていた」とし「結果的に捕れたものを交易品として利用するといった狩猟者の自発的な考え・活動によるものではなく、松前藩ひいては

当時の東アジアにおける強大国、すなわち帝政ロシアおよび清朝の毛皮需要に起因する」と述べ、言い換えれば「強制された」狩猟であったと論じている。

以下に、この出利葉の当該資料の比較の着眼点と類型化を紹介しつつ、北方諸族間における仕掛け弓・罠等の検討を行っていくことにしたい。研究史に関しては、出利葉論文に詳細であるので、ここでは割愛させていただく。なお、引用文中などの [] 内は筆者による註を意味している。

1 仕掛け弓の機能

1-1 自動的に獲物を捕殺する最終目的をもつ

これは、出利葉浩司が仕掛け弓・罠の比較の着眼点として挙げた基本である。そして次の5点を考えている。

(1)接近する(させる)手段：獲物と狩猟具との距離を、狩猟具の殺傷効力のおよぶ範囲内にまで縮める必要がある。どういう手段によってそれを行うのか？ 狩猟具のほうを獲物の通り道に仕掛けるのか、それとも獲物のほうを狩猟具におびき寄せるのか？ また、そのための手段とは？

(2)捕獲する手段：近づいた獲物を、どのようにして殺傷するのか？ 刺すのか、挟むのか？

(3)回収する手段：狩猟具が獲物に作動した後、どのようにして獲物を回収するのか？ 獲物の回収をより容易にするための仕組み、傷ついた獲物を仕掛けから遠くに逃さないための仕組みは何であるか？

(4)機械としての狩猟具：獲物を殺傷する、その運動のもとになる力はどのようにして得られるのか？ また、その力を蓄えるための、仕掛けはどのようなものであるか？

(5)商品生産という観点からの道具の評価：捕獲・殺傷時、毛皮利用という観点からして、何らかの工夫ととれる仕組みが見られるか？

そして、とくに(2)(4)(5)に注意を払うと述べている。(2)(4)は、この狩猟具自体の機能的側面の基本であり、(5)は結果として得られる商品としての毛皮がもつ流通経済的側面であるといえる。これに、可能であれば、集落と狩場としての領域がもつ社会的側面を検討したいが、そこまで民族誌に記載があれば幸いである。さらに、当然捕獲された動物はその「霊送り」を行っていたと思われるが、そのような宗教的側面まで立ち入った記載も探索してみたいものである。

1-2 北海道アイヌの仕掛け弓の一般的理解

では以下に、北海道アイヌに始まって北方諸族の仕掛け弓・罠に関する検討を行うが、まずここで、出利葉が「北海道アイヌの小型獣狩猟具の類型化」として挙げた表を基本にして、後述の北方諸族の場合を加えて、タイプ別の類型化を示しておこう(表1)。それに従ったタイプ分けで示していくことにする。

1 Aa1 タイプ仕掛け弓

表1 北方諸族の仕掛け弓・罾の類型化

運動力の素材	利用の形態	殺傷・捕獲の方法	設置方向	タイプ	
I 運動力に木材の弾力を利用	A 弾力形態=弓	a 射殺(矢)	1 横	I Aa 1	弓利用の射殺型装置
			2 縦	I Aa 2	弓利用の射殺型装置
	B 弾力形態=枝	b 挟殺	— 2 縦	I Ab 2	弓利用の挟殺型装置
		b 挟殺		I Bb	枝利用の挟殺型装置
		c 絞殺(罾輪)		I Bc	罾輪利用の絞殺型装置
	C 弾力利用=割木	b 挟殺		I Cb	割木利用の挟殺型装置
		D 重力利用=丸太	d 圧殺		II Dd
e 吊す(罾輪)			II De	罾輪利用の吊し型装置	
II 運動力に木材の弾力以外を利用	E 重力利用=重石	d 圧殺		II Ed	重石利用の圧殺型装置
	F 重力利用=丸太小屋罾	f 捕獲		II Ff	罾利用の捕獲型装置
	G 股木	g 挟む		II Gg	股木利用の挟み型装置
	H 罾輪	g 挟む		II Hg	罾輪利用の挟み型装置
	I 網	f 捕獲		II If	網利用の捕獲型装置

このタイプの仕掛け弓は、周知のようにひじょうに特殊な形態と構造をもっている。それが北海道アイヌに一般的なものであると同時に、北方諸族にも普及しているわけであるが、その完成度の意味するところおよび普及の背景を知る手がかりを得たいと思う次第である。

図1に示したものは、J. Batchelorが説明している北海道アイヌの仕掛け弓である (Batchelor 1892: 147)。同じ図を使って、Batchelorは別の著作でも紹介している (Batchelor 1901)。その翻訳が最近出ているのでその訳文を見ておこう (バチラー著 1995)。クマとシカを殺すのに用いられる「ばね仕掛けの弓」とされる。「この器具は、三つの部分からなる。すなわち、(1)弓、(2)は一本の木で、この木は端にわずかの溝(a)があり、弓の中央(b)に置かれる。(3)は引き金で、その端(c)は、弓のつるを引っかけないように置かれる。他方引き金の頂点を示す(d)は、一本の紐(4)によって下に引っ張られている。この一本の紐(4)から、別の長い頑丈な紐、あるいはロープが、足跡か、走行とは反対側に位置する木か、棒のほうに行っている。…足跡に沿って歩いている動物が、紐(5)にさわるとすぐに、動物は引き金(3)をはずし(4)、矢が侵入者—人間だろうと、動物だろうと—の近くに飛んで行く」(p384)と説明されている。「spring-bow」と呼ばれている仕掛け弓である。

この仕掛け弓は、通常、「アマクー」(amaku 置く弓)と呼ばれ、「アマッポ」(amappo 置くもの)とも称されるが、「クワリ」(kuari 弓置く)と言われる地域もあるようである。この仕掛け弓を設置する方法は、Batchelorでは示されていなかったが、名取武光は「立木の切り口を割って之を挟み」とし (名取 1972: 64)、萱野茂は「直径7cm くらいの先端がY字型になった棒を土に打ちこみ、Y字状の上の部分に、…水平に置いてしぼりつけ」(萱野 1978: 152)と説明されている。

さらに、出利葉浩司は以下のような説明を加えている。「名取はこの狩猟具について、おもにク

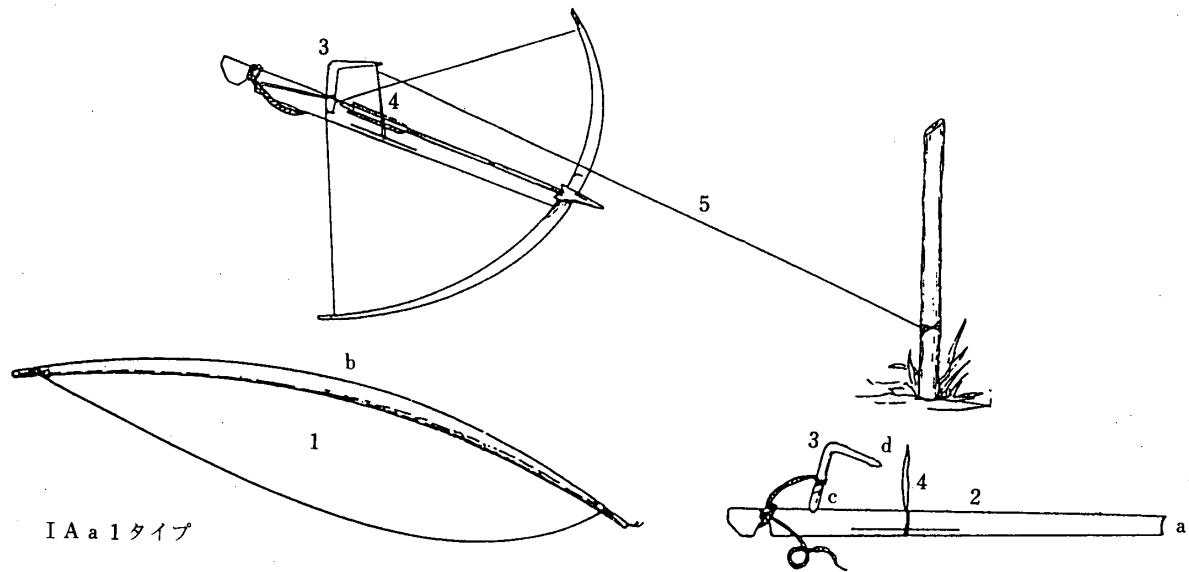


図1 北海道アイヌの仕掛け弓・罠 (Batchelor 1892より)

マ・シカをとるためとのべ、萱野もクマ猟での事例についてのみ記載しているが、キツネなどほかの動物に対して利用されている例も報告されている。たとえば、1791(寛政3)年に蝦夷地を旅行した菅江真澄によると、噴火湾地方の仕掛け弓として紹介するなかで、鼠、兎、狸、鹿、熊と何種類かの動物をとるものであるという(出利葉 1995: 309-310)。菅江真澄の『えぞのてぶり』(1816年頃)を参考にしたものである。秦檜齋の『蝦夷島奇観』(1799年)にも、アマクウの図が載せられているが、「山林曠野の中に弩のごとくなる弓を掛置、諸獣を射獲す。…」と説明される。「諸獣」とあることから、往時はクマ・シカ以外の動物もその対象にしていた可能性はあるが、定かではない。また「山林曠野の中」に置くとあるように、集落とは離れた場所のけもの道に設置されていたようである。そして、出利葉は先の5つの着眼点を次のように説明している。「この道具は、(1)獲物の通り道を把握しておき、そこに仕掛けるもので、張られた紐にふれることにより仕掛けが作動する。(2)毒をつけた矢を発射させ、致命傷をあたえる(射殺)。(3)獲物は矢をうけたあとその場から移動することがいわれているが、鏃につけた毒が獲物の体内にまわることにより、獲物の回収が不可能になるほどの距離を移動することはできない。(4)矢を発射させる運動力は弓そのものである。「く」の字型のトリガーにより弦をひきしぼった状態に固定し弓の力をたくわえる。トリガーの解放は梃子の原理を利用したものである。(5)対象とする個体の大きさ、仕掛け弓との距離など不確定である以上、矢が当たる位置をあらかじめ正確に設定することは困難であろう。したがって、たとえば毛皮を傷つけないような工夫、商品価値を下げないような箇所を射ることはきわめてむづかしいとかがえられる」としている(出利葉 1995: 310)。

さて、この「アマクー」「アマッポ」等と呼ばれる仕掛け弓であるが、「津軽アイヌ」の中にも存在したという記載があると浪川健治によって指摘されている。『国日記』元禄9(1696)年7月5日条に「一、今別之狄共熊取候ニおとし并阿へまつほうと申物ニて捕候由申ニ付き…」とあるとき

れる。和人猟師（マタギ）が用いることがなかったという「阿へまつほう」を津軽アイヌが使用していたのであるが、それが「アマッポ」と解釈されているのである（浪川 1992：69）。

このように、北海道アイヌの場合は横置き仕掛け弓が一般的タイプであったらしいが、これから紹介するように縦置きタイプの弓利用仕掛け罾が存在する。また後述するように、まったく同じメカニズムをもつ縦置き仕掛け弓もナナイ等で存在する。

2 北海道アイヌの仕掛け罾

1 Ab 2 タイプ仕掛け罾

図2-1は、前と同様に J.Batchelor が説明している北海道アイヌの仕掛け罾である（Batchelor 1892：149）。同じく Batchelor は別の著作でも紹介している（Batchelor 1901, バチラー著 1995：382）。

この罾は「カワウソ、キツネ、タヌキ、ノウサギ、また（近くにいるときには）オオカミをつかまえるのに用いられる。このわなは通例は、これらの動物の足跡におかれる。それゆえ、動物が紐の小部分を踏むと、わなの紐がゆるんで、足をつかまえる」とされ、図の「(1)はわなの弓である。(2)は、端が裂けた一本の木からなる主要な枠組である。その両半分は、底部の横棒(3)で離されている。(4)は可動性の木片で、刻み目(a)があり、この刻み目に弓のつるを置いて、結びつける。この木片の下端(b)は切り口（それは、横棒(3)まで伸びていて、9インチ [22.5cm] の長さがある）のなかに置かれ、横棒(3)の上に位置している。…(5)はわなの引き金である。一本の紐が、下の横棒(3)から出て、弓の下を横切って引き金(5)に達している。だから動物が紐を踏むと、引き金から紐がはずれ、横棒(4)が(3)のほうに下降して、獲物の足をしっかりとはさむ。これらのわなは非常に強力で、不運にもつかまえられたどんな動物の脚もかなり確実に折ってしまう。動物がこれらのわなを持って逃げないように、一般に近くにある木にしっかりとめられている」（p384）と説明されている。ここでは餌のつけ方の説明はないが、名取武光によると、以下のようにいわれる。

「丁字形の矢と横木の間を入口とし、其の奥10糎の所に餌を下げる。周囲は入口を残して全部を柴で囲むので、動物は入口から頭を入れて餌を引く。餌がはづれて弦が戻るので、丁字形の矢先と横木の間で首を挟まれて斃れるのである。柴で周囲を囲む代わりに、樺・桜等の皮で円錐形を作り、之を着ける事もある。又箱を造って撥形の矢で押へる趣向のものもある。装置の形の大小は、動物の大小に比例するのであって、貂、狐、エゾ鼬 [イタチ]、鼠等は何れも之で捕へられる」（名取 1972：66）と。そして「弾弓」（アック）という名前と呼んでいる。アックとは ak（矢を射る）のことであろうか。

ここでさらに注意しなければならないのは、箱形のものが存在することである。

1 Ab 2 箱形タイプ仕掛け罾

図2-2・3は、その箱形タイプのものであると思われるものである。左側は、同じく Batchelor が説明するものである（Batchelor 1901, バチラー著 1995：383）。「アイヌはネズミを殺すさまざ

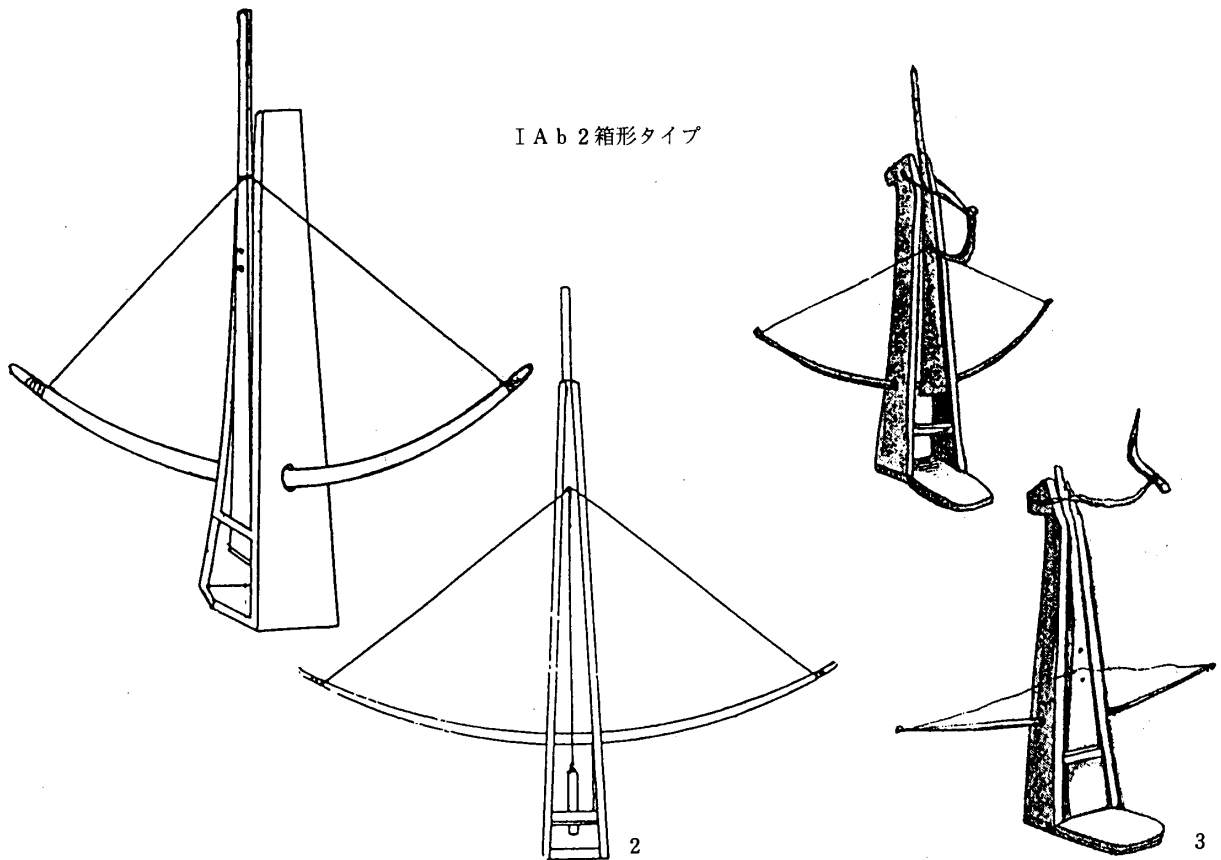
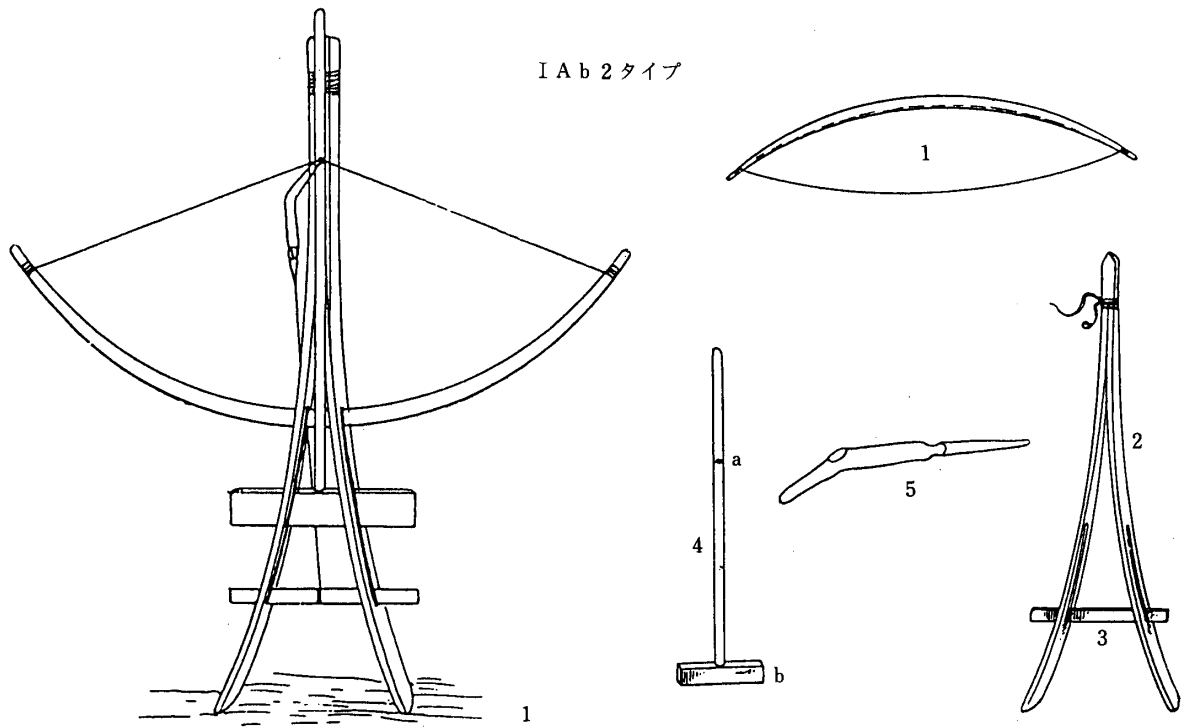


図2 北海道アイヌの仕掛け畏 (Batchelor 1892, 北構訳 1978より)

まの方法をもっている。弓はクマやシカに対して用いられるのと同じように、その走路や足跡におかれる。ただ規模が小さいだけが違う。クマや他の大きな種類の動物は引き金に結びつけられた紐を足でさわるが、ネズミはいつもそれをかじってばらばらにする。ネズミ取りの別の方法は、肉の上に重い板をぶら下げることである。この肉は、引っ張ると、板が落ちる軽い仕掛けに結びつけられている。…別のネズミ取りは、動物が内部にある餌を引っ張るとすぐに、蓋が閉じるように弓が仕掛けられた単なる長方形の箱からできていた。このわなはネズミの体の真中でネズミをつかまえる。頭はわなのなか、尾はわなの外にある」(pp384-385)と説明され、図2-2の左は「セットされたわなの上部を示し」、図2-2の右側は「餌を結びつけたわなの内部の紐を示している」ものである。

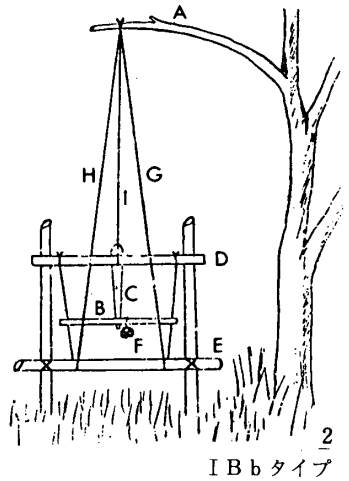
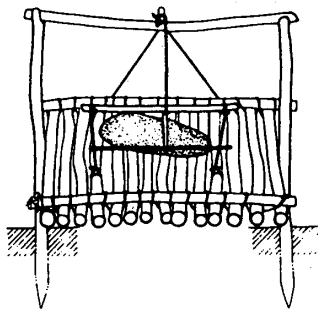
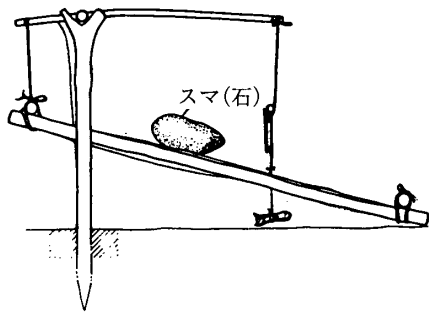
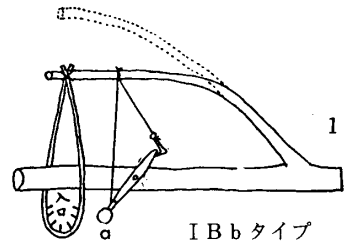
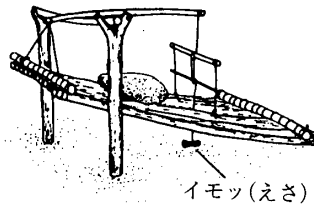
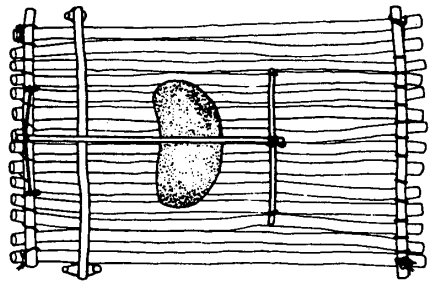
図2-3は、1893年に蝦夷地を旅行したA.H.Landorが記録したネズミ罾である。説明がまったくないが、箱形であり、しかも引き金に相当する部分は前の仕掛け弓と同じような形態をとっている。撥形の矢がはずれると、箱に蓋をするようにできている(北構訳 1978:71)。

以上、この仕掛け罾は二つのタイプに分けられるようである。ともに「ア」と呼ばれるものであるが、一つは「I Ab 2タイプ」と呼べる二股の枠組をもつもの、そしてもう一つは「I Ab 2箱形タイプ」と呼んだ箱形の枠組のものである。出利葉浩司は、とくに前者のタイプの罾に対して以下のように結んでいる。「(1)餌をつかって獲物を装置におびきよせ、餌を食べようとするにより仕掛けが作動する。(2)矢の先をT字型にする点あるいは撥形の矢で押さえるという点に注目すれば、獲物はT字あるいは撥形の先端によって挟まれるもので、挟み殺すあるいは逃げるできないようにするものであるといえる(挟殺)。(3)獲物はこの装置に挟まれた状態であるため、その地点から移動することはできない。(4)また、その運動力は弓そのものである。「く」の字型のトリガーにより、弦をひきしぼった状態に固定し弓の力をたくわえる。トリガーの解放は梃子の原理を利用したものである。(5)獲物を刺突するのではなく挟むことにより狩猟する。このことは、一般に、毛皮の商品価値をさげないためであるといわれている」(出利葉 1995:310)と。以上のA弓の弾力利用の他に、B枝の弾力を利用するタイプも見られる。

I Bb タイプ仕掛け罾

図3-1の装置はこのタイプに入れることができるものである。名取武光(1972)が紹介している「捕獸器」である。獲物が入口から首を入れてaの餌を引っ張ると、仕掛けがはずれて釘を打ってある入口部分と太い枝に挟まれ、刺殺するというメカニズムである。入口を残して周囲全体は柴で囲んで用いるとされる。出利葉によると以下のようにいわれる。「(1)餌によって獲物をおびきよせ、餌を食べようとするにより仕掛けが作動する。(2)首を挟む部分に釘がついている。どちらが致命的か判断できないが、ここでは釘による刺殺とかがえておく。…(3)獲物は装置に挟まれるのであるから、そこから移動することはできない。(4)まげられた木枝のもつ弾力により、獲物を挟むものである。装置を作動させるトリガーは、中央を釘で止め、そこで回転するようにした天秤式である。(5)釘が刺さるといふ点は、すくなくとも毛皮に傷がつくことが想定される」(pp311-

宇田川 洋



IIEdタイプ 7

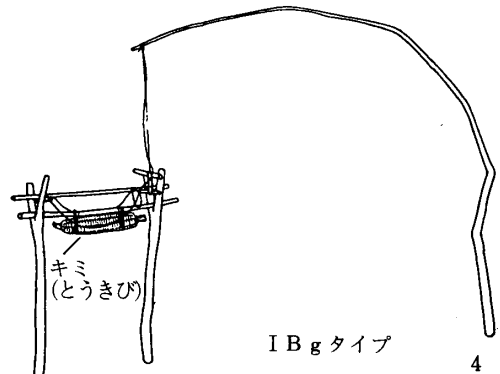
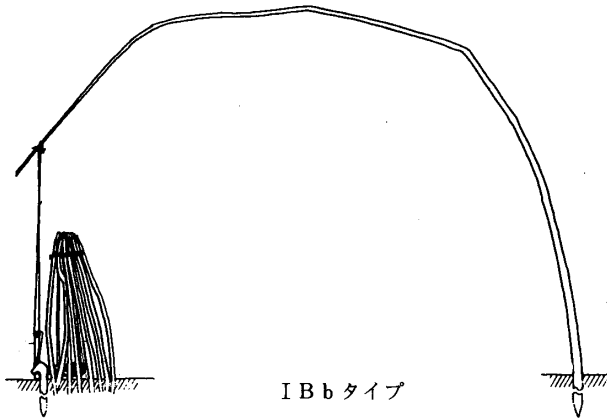
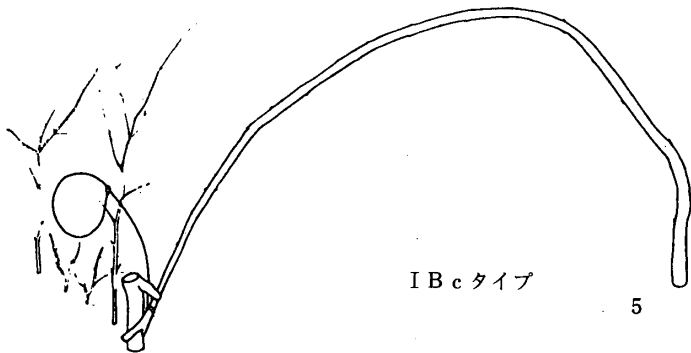


図3 北海道アイヌの仕掛け罾 (萱野 1978, 名取 1972より)

312)。

形態は異なるようであるが、メカニズム的にこれと同じタイプとすることができるのは、図3-2の資料である。名取武光(1972)が紹介している「チャクペ」(鳥挟み)と呼ばれるものである。以下のようにいわれる。「立木の枝Aの弾力を利用する。この弾力を紐G及びHで引き止めEを繞ってDに結びつける。一方Iの先端に回転式にCを付け[これ]に伝えられてゐる弾力をD[が]受け、Cの先端にBを当てて弾力を移し、之をGHに支へる。Bから適宜に餌Fを下げ、鳥が之をついばむ為には是非Bに止るやうにする。Bに止った鳥の体重でBはCの先端と紐G及びHの間を迂って下にはづれる。従ってCが回転しDがAの弾力でEの方向に引かれる。Bに止って居た鳥が、DとEの間に挟まれるのである。Fは必ずしもBに着けなくとも、必要な位置にさへ静止させる事が出来ればよい」(p64)。枝の弾力を利用した挟殺型装置である。

また、図3-6の装置もこのタイプに属するもので、これも萱野(1978)紹介のものである。「エヤミカ」(カケス糸)と呼ばれるカケス罾である。カケスが餌を食べに仕掛けの中に首を入れると、首が締められる仕組みになっているというもので、枝の弾力を利用している。

I Bc タイプ仕掛け罾

図3-5である。萱野(1978)によると「イセポカ」(ウサギ糸)と呼ばれるウサギ罾である。木の枝の弾力を利用し、罾輪に獲物が入ると枝がはね上がって首を絞殺する仕組みになっている。出利葉は「(1)餌は用いず、ウサギの習性すなわち通り道を利用…(2)投げ縄式の輪を仕掛け、それにウサギが首をつっこむとウサギの首が締め、同時に曲げられた木材のもつ復元力を利用して獲物をつり上げるもの(絞殺)。(3)投げ縄がしまる原理および木枝の弾性を利用…(4)ウサギは首を吊られた状態になるため、その場から移動することはできない。(5)ウサギは締め殺されるのであるから、毛皮にきずがつくことはない」(p311)と述べている。

I Bg タイプ仕掛け罾

図3-4の萱野紹介のものである。前の「I Bb タイプ仕掛け罾」と同様の「エヤミカ」とされるカケス罾である。餌を食べようとしてカケスが止まり木に止まると、仕掛けがはずれて足を挟む枝の弾力を利用した装置である。

以上の運動力に木材の弾力を利用するタイプの他に、重力等を利用する例が見られる。

I Cb タイプ仕掛け罾

図3-3の写真のものは、重力利用のひとつのタイプである。「チエペレニ」(割木)と呼ばれる装置である。名取武光(1972)が紹介しているものであるが、周囲の柴囲いの入口から獲物が餌を引くと、丸太が落下してくる装置になっているらしい。ムジナ(タヌキ)用である。

II Ed タイプ仕掛け罾

図3-7は、重力による重石の落下を利用した圧殺型の装置である。萱野茂(1978)によると、テン獲り罾「ホイヌア、ペ」とされ、山奥の小沢のへりに仕掛けるといわれる。獲物が餌をつけた紐を引っ張るとすぐに仕掛けの棒がはずれ、重力で石をのせた簀が落ちて獲物は圧死するという。

このタイプの装置について出利葉は次のように説明している。「(1)餌により獲物をおびきよせ、餌を食べようとする事により仕掛けが作動する。(2)圧迫して狩猟するものである(圧殺)。(3)圧迫させるのであるから、獲物はそこから移動することはできない。(4)簧がおちる運動力は重い石、重力である。(5)獲物を全体的に圧迫するのであるから、複雑骨折をおこさないかぎり毛皮をいためることもない」(p310)と。

3 樺太アイヌの仕掛け弓・罾

1 Aa1 タイプ仕掛け弓

樺太アイヌの場合も、北海道アイヌと同じメカニズムの仕掛け弓が使用されていたことが分かっている。例えば、西鶴定嘉は『蝦夷島奇観補註』図を引用しながら、次のように説明している。「仕掛け弓を北海道アイヌはクアマク、普通アマツポウといふが、樺太アイヌはユウルクウといふ。ユウル即ちあて木で造った弓の義である。樺太アイヌは北海道アイヌと異りブシを全く用ひない」(西鶴 1942: 64-65)。

また、葛西猛千代もこれについて触れている。クマは「樺太のアイヌは往時は弓矢や槍で捕ったが、後には一種の仕掛け鉄砲を用ひた。即ち熊の通路を挟んで一方に高さ四、五尺の棒杭を立て、これより丁度熊の胸に当る高さに糸を張って、この糸の一端は反対側に仕かけてある鉄砲の引き金に結びつけてあるから、熊が糸に触れれば発砲するのである」(葛西 1943: 46-47)。ここでは弓が鉄砲に代わっているが、北海道アイヌも同様に、「アマッポ」といえばふつうは仕掛け鉄砲を指して用いているようである。

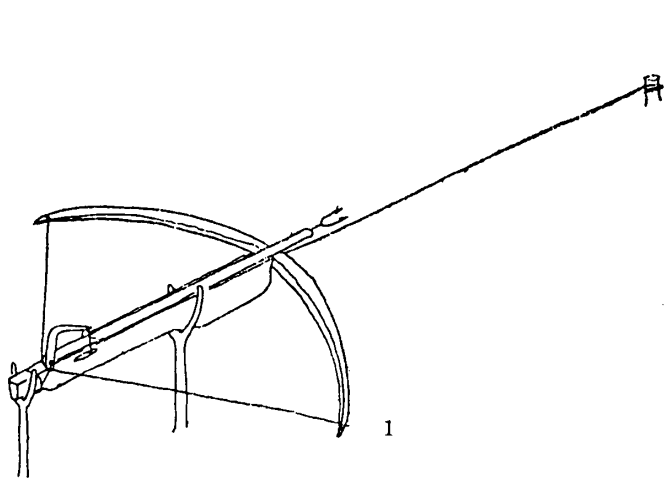
図4-1に示したものは、山本祐弘が紹介している「ユールクー」(仕掛け弓)である。「チアマクー (ci-ama-ku 「我々が・仕掛ける・弓」)ともいい、俗にいうアマッポのことである。熊、山馴鹿、狐、貂、兎等を獲るに用いた。熊を獲るものは大きいので特にポロクー(「大きい・弓」の義)と称した」と説明している(山本 1970: 248)。

1 Aa2 タイプ仕掛け弓

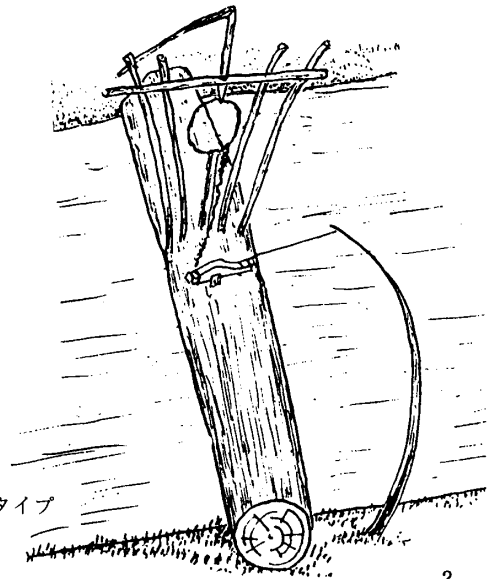
図4-3に示した仕掛け弓の縦形のもは、『北蝦夷図説』巻之三に見られる仕掛け弓である。カワウソ用のものとされている。「獺を獲る亦図のごとくなり、自発弩を製し、河辺に置、獸来て垂糸の魚[図中のa]をひく時は、弩おのづから発して獸を得るなり」(大友編 1944: 330)と説明されている。

1 Bc タイプ仕掛け罾

葛西猛千代がテン猟に関して述べている。「貂猟は9月中旬より遅くも11月上旬の間で、河水が未だ結氷しない内にやる。猟法は河川上流の細溪の川浚ひをなし、所々に1本の丸太を架設し、其の中央に馬の毛で作った罾を仕掛け、貂が餌を漁って、沢より沢へと此の丸太を渡れば丁度貂の首に此の馬毛の罾がかゝるやうにしてある」(葛西 1943: 48)。なお、樺太では大正7年7月以降はテンおよびジャコウジカは庁令により保護獣となって、禁猟となったことを指摘している。

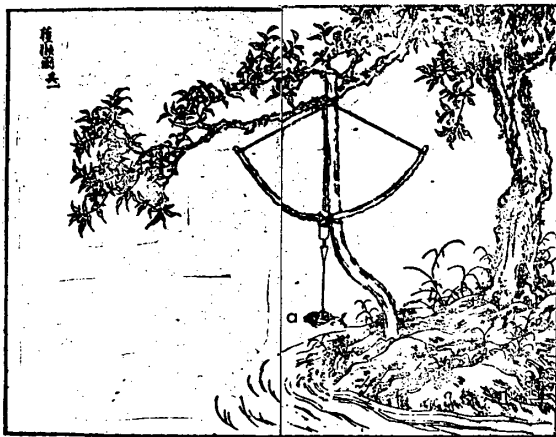


IAa1タイプ



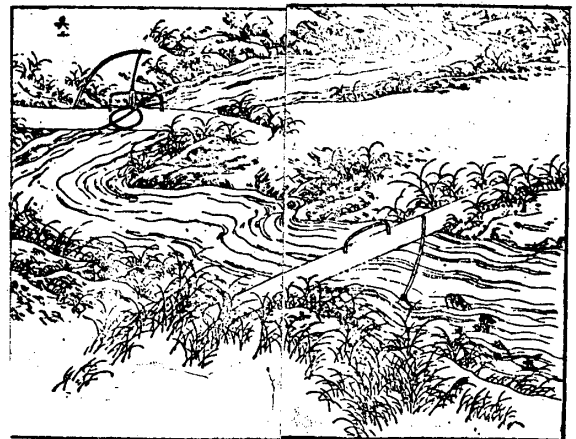
IBcタイプ

2



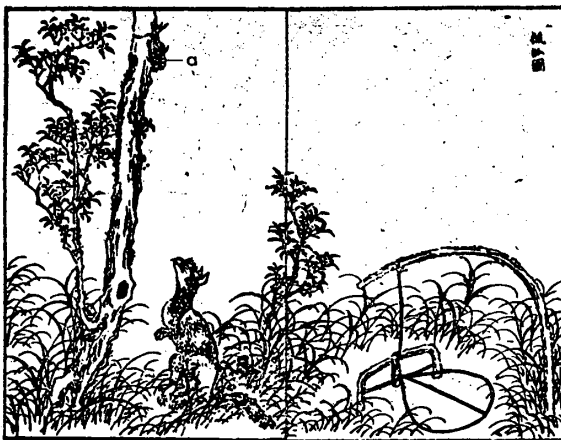
IAa2タイプ

3



IBcタイプ

4



IIGgタイプ

IBcタイプ

5

図4 樺太アイヌの仕掛け弓・罾 (山本 1970, 大友編 1944より)

この罾は、山本祐弘によると「ホィヌカー」（貂捕罾）と呼ばれ、図4-2のものが示されている。「流れの上に丸太を渡してこの丸木の上に柳の柴で柵をつくり、その中央に馬の尾を数本束ねて輪としたものを罾穴として仕掛ける。貂が丸太を伝い渡る際、罾穴をすり抜ける瞬間、はね木が横にはじいて輪がしまり、貂の頭がしまって捕獲出来る」（山本 1970：248-250）と説明される。この資料に関しては、「marten trap」として E. Ohnuki-Tierney (1974：18) も引用している。

図4-4のものは、『北蝦夷図説』巻之三に見える同タイプの仕掛け罾である。「ホィヌを獵すること図のごとく」（大友編 1944：329）とあり、前の「ホィヌカー」と同じである。

同じく『北蝦夷図説』巻之三に見える図4-5の右側に描かれている罾は、この I Bc タイプの仕掛け罾である。「獵狐図」の一部の絵であると考えられるがその説明はない。しかし、これは背景となっている場面は若干異なるが、『北夷分界余話』巻之五に見られる「リクンカモイを獲る」図とまったく同じ仕掛け罾である（洞・谷澤編注 1988：56）。おそらく『北夷分界余話』の方が正しいのであろう。ところでこの「リクンカモイ」は、出利葉によるとジャコウジカと考えられている。

II Gg タイプ仕掛け罾

図4-5の左側のものである。『北蝦夷図説』巻之三から引用したものであるが、次のようにいわれる。「狐を獵するの術図のごとく、枝木を建て、其上に魚〔図中の a〕を掛る時は、狐魚を羨みて木を攀ぢ、上下する時足此枝間にはさまれて、終に得らると云」（大友編 1944：330）。股本利用の挟み型装置である。

4 千島アイヌの仕掛け弓・罾

千島アイヌのこの種の狩猟装置に関する情報はあまりないのが実情である。鳥居龍藏によると、「アイヌは、陸上動物を狩猟するには、始めから罾を使用した。この罾はかなり複雑なものであったが、巧妙にして、かつきわめて確実なものであった。地面に立てた杭の上に仕掛けた弓矢はつねに毒が塗ってあった。蝦夷アイヌはこの罾をアマポ amapo と呼んでいる」（鳥居 1976a：455）。

これはその説明から明らかに「I Aa1 タイプ」の仕掛け弓と解釈できる。アイヌ語の名称は記録されていないが、陸上動物の捕獲用とされている。

また、鳥居によると A. ポロンスキーの『千島誌』（1871）を引用して次のようにもいわれる。「狐は落とし穴や罾を用いたり、適当な場所におとりのチャイカ chaika 鳥をつないで捕える。鳥が騒いで啼くので、狐がこれを食べにやってくる。そこを近くに隠れていて矢を放って殺すのである」（p455）。このキツネの罾猟と同様に仕掛け弓の構造等を詳しく知れないのが残念である。

5 ウィルタの仕掛け弓・罾

ウィルタの狩猟装置については、川村秀彌が紹介している。キツネ猟に関しては、冬季積雪の頃に行うが「犬を使わず足跡をつけて何処までも追って行き、風下から鉄砲で射止める方法のほか、

ストリキニーネを蠟で包み、魚の腹或は肉の中に入れ、狐の通る原野に撒布する方法も用ひる。以前はアマッポ（仕掛け弓、オロッコ語 *du:ngl...*）やブシ（アイヌの使ふ毒草、オロッコ語 *furi okto*）も用ひた。又たまにトラバサミ（オロッコ語 *kapka*）を使ふこともある」（川村 1942: 67）と説明されている。カワウソ猟は「秋の末結氷以前に、川獺の上る川岸にトラバサミを埋め、触れると弾機にかゝる様にする。昔はアマッポを用ひた。アマッポの鏃は、獵物の種類によって種々異なる」（p68）という。さらにテン猟に関しては「貂狩には以前よく五十度の国境線を越えて露領に入ったもので、その辺にはそれぞれ貂狩の獵場を有してゐた。秋の末小川の凍結する以前、丸木を伐り倒して幾つもの橋を架け、その上に…係蹄をかける。貂が橋を渡らうとして中央の輪をくゞる時、弾機の木を留めた紐が外れて、首を締められたまゝ川底に叩き込まれるのである。又越年のため貂が巢籠りに行く途にアマッポを仕掛ける方法もあり、或は冬季その足跡を辿って二日も三日も不眠不休で後を逐ひ、木に登ったところなどを射殺したりする…麝香鹿は針金の係蹄で捕へ、又クヅリ、樺太山猫なども狩したが、今は殆んど行はれていない」（pp68-69）と説明される。

以上をもとに、池上二郎（1982）は次のように解説している。

Ⅰ Aa1 タイプ仕掛け弓

この仕掛け弓は「ダングラ」（*dængurə*）と呼ばれ、カワウソを主に獲るとされ、アイヌのアマッポと同種とされる。「一本のくいにとりつけた台木の上に、*pinnəul*（ふたまたの矢じり）のついた *boogo*（矢がら）をつがえた *burixə*（弓）をおき、張った *xuli*（つる）を台木にとりつけてある *čaglaa*（引きがね）にかける。引きがねのさきは *piiməəpu* というひもで台木へつないである。矢がらには台木からひもがついている。*xumultə*（前方の地面にさした棒）から張った *sirə* というひものは *pakpirau* という部品をつかって引きがねにとりつけてある。矢は *xumultə* の方向にむけられている。ねらうけものが *sirə* にふれて *sirə* をひっぱると、これが引きがねからはずれて引きがねが引かれ、それとともにつるも引きがねからはずれて矢が発射される」（p 104）という。

川村は写真を示しているが、ここでは割愛する。それは本論図 4-1 に示した樺太アイヌの「Ⅰ Aa1 タイプ」の仕掛け弓と同様のものである。鏃の先端が二股になっているのも同じである。なお、図 5-b は川村が紹介しているこの仕掛け弓の鏃であり、長さ 107mm とされ、テン猟用とされるものである。同図 a は、長さ 150mm の仕掛け弓の鏃でカワウソ猟用のものである。

Ⅰ Bc タイプ仕掛け罾

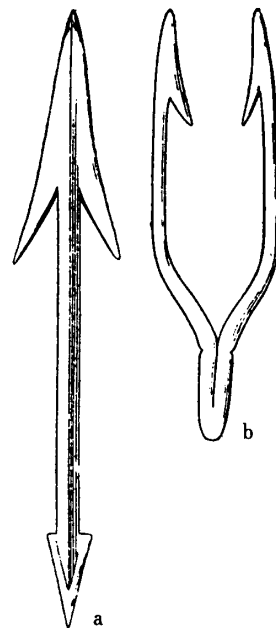


図5 ウィルタの仕掛け弓の鏃（川村 1942より）

これも川村紹介のもので、池上の説明は以下の通りである。罨 (puta) と呼ばれ、「てんや木ねずみをとる猟具である。toogo (倒れて橋のように川にかかった木) の上にしかけてある。それを渡るてんや木ねずみが、しかけた輪をくぐるとき、輪についたひもが引っぱられてその輪が首を絞める」(p104) という。これも、写真は省略するが、図4-2の樺太アイヌの仕掛け罨とメカニズム的にはほぼ同じものである。ここでいうキネズミとは、ふつうエゾリスを指すが、樺太ではカラフトリスのことをいうらしい。

6 ニヴヒの仕掛け弓・罨

I Aa1 タイプ仕掛け弓

E. A. クレイノヴィチ著・柘本哲訳 (1993) によると、このタイプの仕掛け弓について以下のように説明がある。トゥミ河畔のニヴヒの森林獣の狩猟法である。「冬がやって来ると、仕掛け弓を使ったり、股木を使ってキツネ猟をする。弓は獲物を射るため人間が拵えた独創的な発明品だが、仕掛け弓はその弓をさらに改良したものだ。要するにその用途は野獣自ら仕掛け弓に番えられた矢でわが身を射る点に尽きる。その目的を達するため狩人は特別拵えの銃床の小溝に弓を載せるが、その銃床の小溝には矢が填め込まれている。張った弓弦には木製の小さい鉤を取り付け、この鉤に馬毛または糸を結わえる。この糸を動物の通ると思われる道筋に渡して張り、小さい棒に結びつける。動物は糸に触れて、弓弦から鉤を引き外す。矢は仕掛け弓から発射して、動物を射貫く。各種の動物に応じて、さまざまな仕掛け弓とその仕掛け弓用の特殊な照準板がある。その最大のものがクマ用の仕掛け弓だった」(p109) とある。

カワウソについても「仕掛け弓」で獲ると説明があるが、このタイプか「I Aa2 タイプ」仕掛け弓かは不明である。

また、ニヴヒのこの種の装置に関しては、Ч. М. Таксами (1967) の研究が詳しい。ニヴヒの家には小銃があり、それを使う狩猟が上手であるといわれる。しかし「すべての狩猟が小銃だけに頼るものではない。多くの昔からの狩猟装置も選ばれている。たとえば、罨、自動罨、輪罨などである。多くのニヴヒの間で出会ったよく知られた狩猟法があり、彼らと話をし、そこで気づいたのは、彼らの熟練した狩猟法は手製の装置であるということである」(p120) といわれる。ではそれらをタイプ別に見ていくことにしよう (図6~8参照)

I Aa2 タイプ仕掛け弓

「ユル」(юру) と呼ばれる仕掛け弓である。「弓、矢、銃床から成り、複雑なメカニズムをもっている。仕掛け弓の銃床は長さ1m内の木製のもので作られる」(p120) という。

図6-4は仕掛け弓(弩)とされるもので、加藤九祚(1986:239)によると、「長さ1mほどの台棒(A)の一端に段をつけ、これに弓の木部をあてがう。引き金の役割をする短い棒(B)は『く』の字に曲がっており、その下端は台棒に固定された輪(C)に引っ掛けられている。この輪からは紐(D)が下がっており、雪の下に埋められた杭にしばりつけられる。テンがこの紐(D)

を踏むと矢 (E) が発射される。なお、これは垂直に仕掛けられる」と説明される。その図から判断して、「縦形」ではあるが「I Aa1 タイプ」の仕掛け弓とまったく同様なメカニズムと構造をもっており、ここでは縦形の「I Aa2 タイプ仕掛け弓」に含めておくことにする。樺太アイヌの場合の図4-3の例と酷似しているものである。

I Ab2 タイプ仕掛け罾

前出の北海道アイヌの「I Ab2 タイプ」の縦形仕掛け罾と同じものがニヴヒにも見られる (図6-5)。それは「チェルカーン」(черкан) と呼ばれる仕掛け罾である。「クロテン用のニヴヒの仕掛け罾は垂直に設置される。…チェルカーンの基本は、分岐した台架から成っている。台架の部分の中央部に弓が固定される」(Таксами 1967:122) とされるが、加藤九祚 (1986) の説明を引用しておこう。「弓の弦は上下に動く『逆T形棒』(A) の上端と結ばれている。『逆T形棒』(A) の下に、同じく自由に上下に動く細い横棒 (B) がついている。棒の上端に短い棒 (C) が下げられ、この一端によって張られた弦が固定される。短い棒 (C) の手前の端末から長い紐を下げ、細い『撃鉄棒』(D) をしばりつける。テンは A と B の間を通して B を動かすと、D がはずれて、上部の弦によって A が下へはじき落とされ、テンは押しつぶされる」(p239) という。なお図6-4・5はЛ. И. Шренкуによる図であるという。

I Bc タイプ仕掛け罾

図6-2に示したもので、テン、リス用の装置であるという。加藤九祚が指摘しているように、『北蝦夷図説』中の本論の図4-4 (「ホィヌカー」貂捕罾) と同種と考えられる。クレイノヴィチの説明では次のようである。「クロテンの括り罾は小川を跨ぐように切り倒された樹幹に仕掛けられたが、…括り罾を仕掛けるには、前もって小さな棒でこの丸太に区切りを付けなくてはならない。そのために丸太には斧で横に割れ目を入れた。真ん中の割れ目にはムグクゥという短く太い棒を差し込んだ。両側の割れ目にはヴァズヌィという長い枝を差し込んだ。次に狩人は枝を切り、その枝の中ほどに縦に割れ目をつけ、そこにタグァイルナクスという短い小枝を差し込んだ。丸太に差し込んだ枝の上部には切り目を付けて、そこにこの短い小枝を水平に差し込んだ。この場合垂直なほうの小枝タグァイルナクスは、短い棒ムグクゥと向かい合わせにすることになっていた。その間に括り罾を入れるだけの空間が残されていなくてはならなかった。狩人はこれらの棒の先端につけた割れ目に括り罾を差し込んで広げた。そのあと岸の水際に丈夫で弾力のある枝 (チャクヴィル) を突き刺した。この枝に妻が縋った縄を括りつけ、もう一方の端に鉤 (チムルィフ) を縛り付けた。それから小枝の付いた特別な長い棒 (ポチイハンド) を使って、枝 (チャクヴィル) を作り付けの仕切りの方へ曲げ、特別な床部が切り込んである棒ムグクゥの下の部分に引っ掛けた。そして枝 (チャクヴィル) の端をしっかりと結わえつけた。これが済めばクロテン獵の括り罾の仕掛けが完了したとされた」(pp111-112)。

II Dd タイプ仕掛け罾

図6-3は丸太を利用した圧殺型装置である。テン用とされ、太い木の幹の高さ1mくらいのと

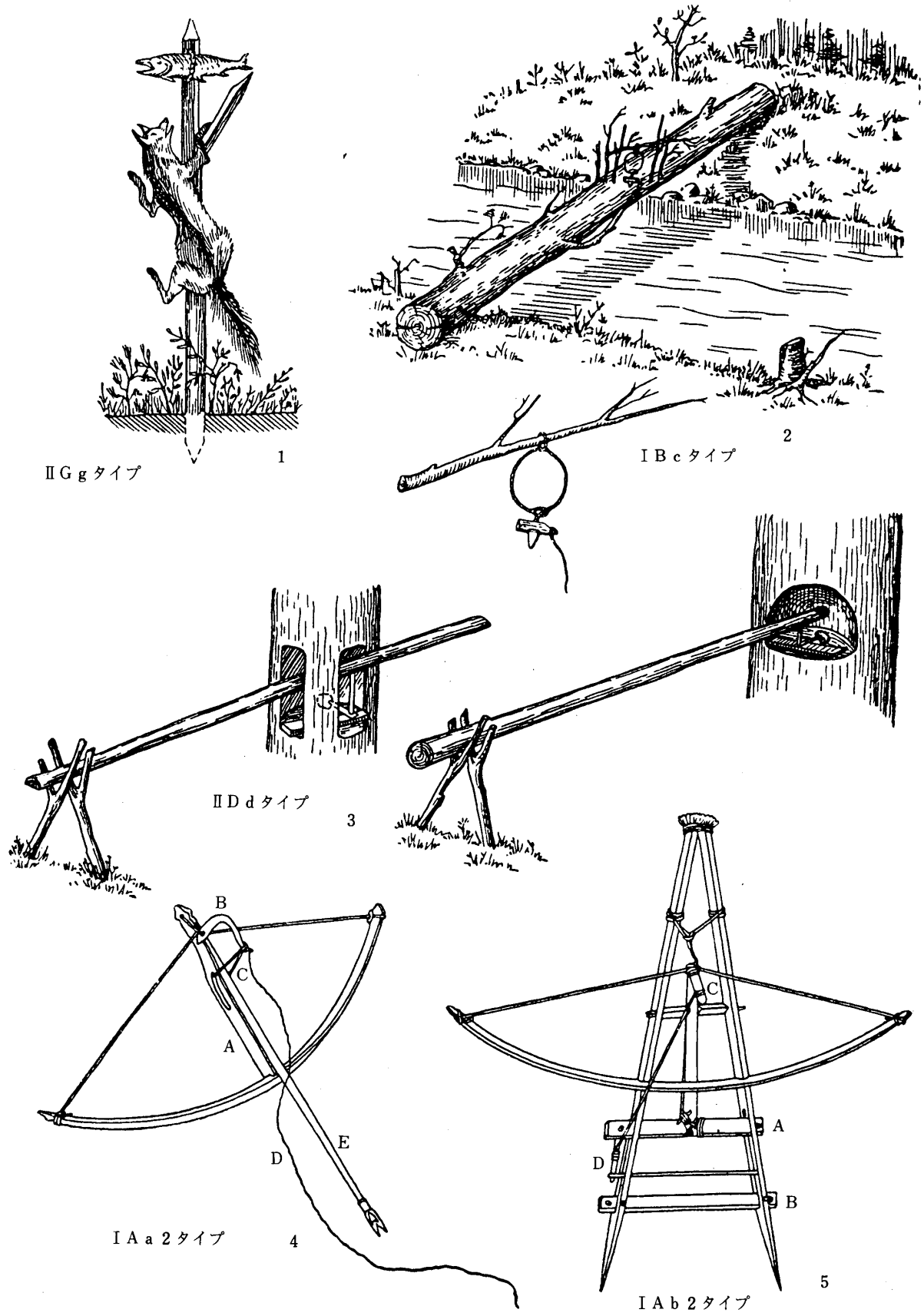


図6 ニグヒの仕掛け弓・罠 (Takami 1967より)

ころに切れ目を入れ、餌を採ろうとしたテンが別の丸太の落下によって圧殺される仕組みのものである。これとまったく同じタイプのテン用の罾を A. V. Смоляк も図示している (Смоляк 1960 : 120)。

II De タイプ仕掛け罾

図7-1aに示したタイプはクマ用の輪罾である。加藤九祚の説明によると「熊の道を横切るように丸太をさしかけ、そこに輪を吊るす。丸太の中央部を樹木に固定し、丸太の太い方の端末を二またになった支柱に置いて、その上から倒木などを立てかけておく。熊が輪に首を突っこむと、はずみで丸太が支柱からはずれ、熊は宙吊りになってしまう」(p242) 仕掛けである。

II Ff タイプ仕掛け罾

図7-2に見える丸太小屋罾はクマ用の装置である。これも加藤九祚が説明している。「図のように丸太小屋をつくって、扉と餌をてんびんにかけて仕掛けておく。熊が中に入って餌に食いつくと、扉が落ちて逃げられなくなる。それを穴からねらって銃で仕留めるのである」(p242) と。

II Gg タイプ仕掛け罾

これは前述の樺太アイヌの場合と同様な仕組みをもつものである (図6-1)。上端が二股になった1.5 mほどの高さの棒を用意し、それらの先端は尖らせておき、餌をつける。キツネがその餌を食べようとする、二股部分に足を挟まれるのである。これについてはクレイノヴィチも説明している (クレイノヴィチ著 1993 : 109)。

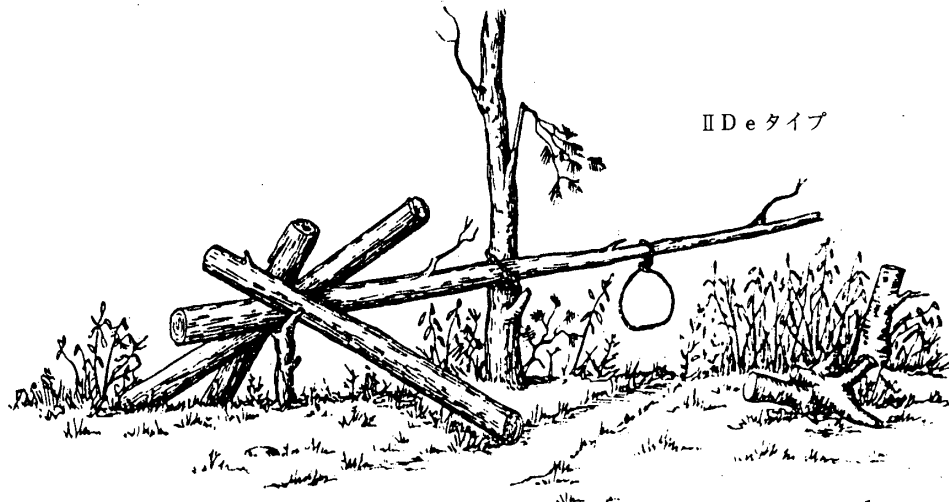
II Hg タイプ仕掛け罾

図7-1bに示したものは、クマ用の輪罾である。これも加藤九祚の説明を見ておく。「熊の穴に通じる小道を横切るように、小道の両側の細い数本のヤナギを利用して、まん中に輪のついた縄を下げかけておく。輪の高さは、中ぐらいの大きさの熊の頭の高さにしておく。夜間、熊は穴に帰る途中頭を輪に突っこみ、それに気づいてあわてて逃げようとして前に引っぱる。両側が太い木であれば縄は切れてしまうが、ヤナギのようにしなやかな木であれば、力を出してもどうにもならないのである」(p242) という。

また、図8-1~3の輪罾は鳥用のものである。1はエゾヤマドリ用、2はシギ用、3はライチョウ用の罾である。それぞれの鳥類の習性を利用したもので、1はナナカマドの枝を利用した輪罾である。2はジグザグの柵をめぐるし、シギの通路を作りそこに罾を仕掛けるものである。3は柵と通路を作り、通路部分に罾を仕掛けるもので、ライチョウの好む木の実を枝つきのまま餌としてまいておくとされる。

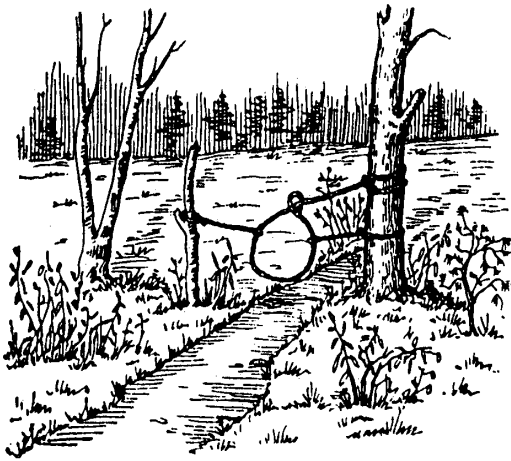
以上の他にも、クロテンのおとし罾などいくつか知られている (クレイノヴィチ著 1993 : 113)。

さらにクレイノヴィチによると、獲物の送り儀礼についてもいくつか報告されている。例えば、カワウソの目は箱に入れるという。「箱を作るにはサルヤナギの幹を切り取る。この幹からは皮を剥がさず、削って尖らせる。削り掛けは切り取らない。その芯を折って、そこに目を入れる」(p



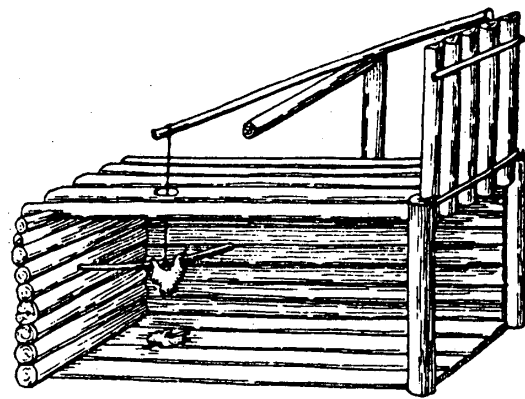
II D e タイプ

1 a



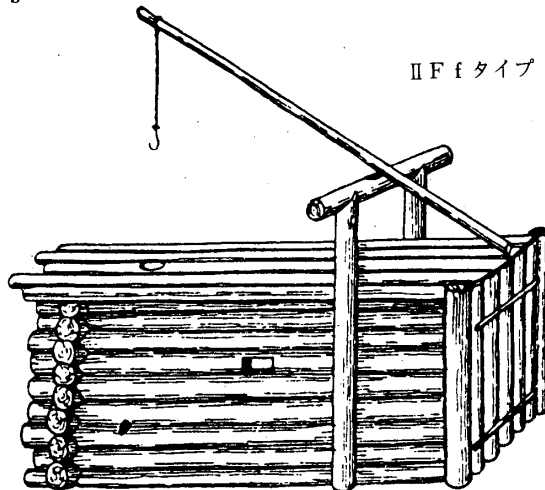
1 b

II H g タイプ



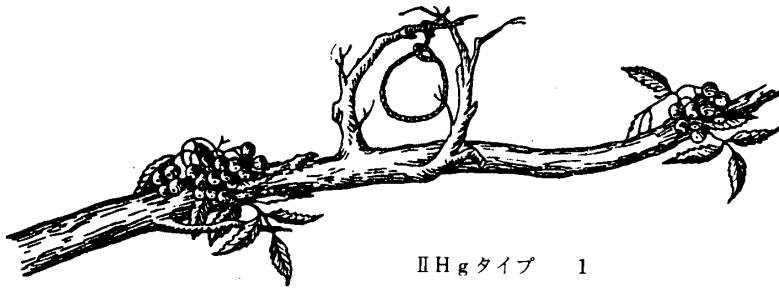
2 a

II F f タイプ

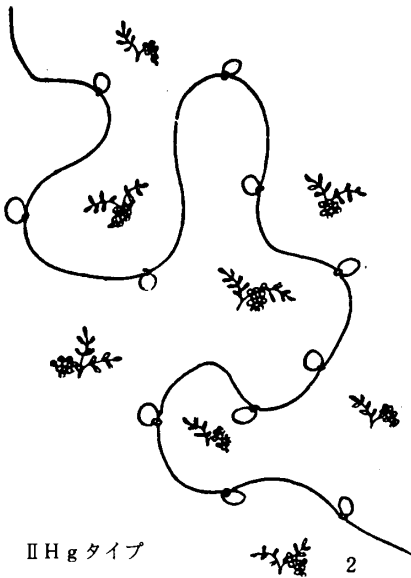


2 b

図7 ニヅヒの仕掛け罠 (Таксами 1967より)

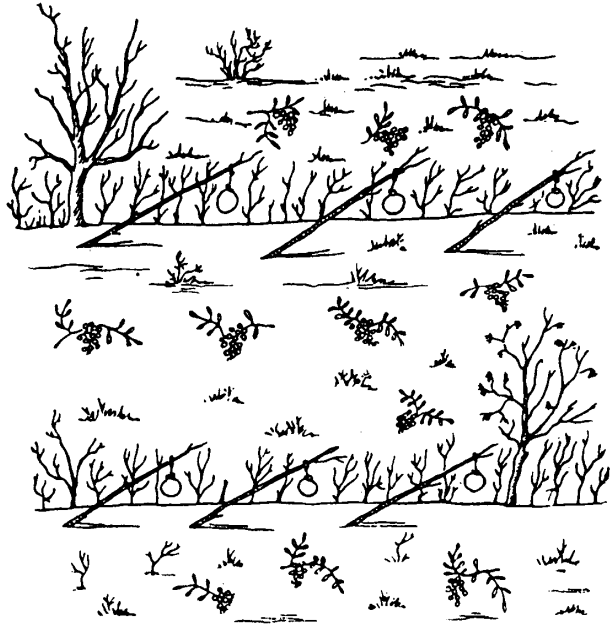


ⅡHgタイプ 1



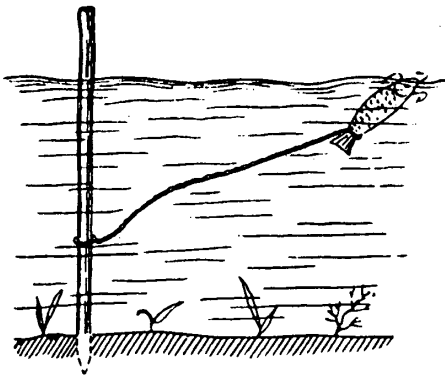
ⅡHgタイプ

2

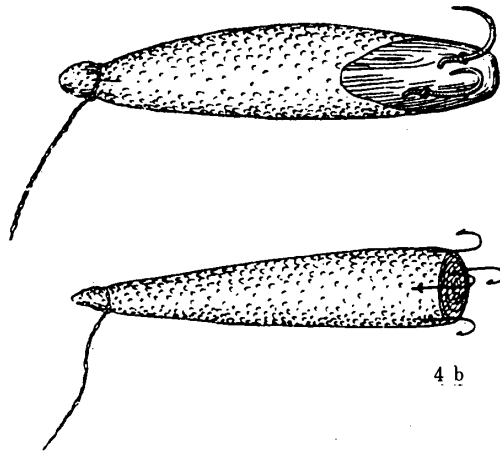


ⅡHgタイプ

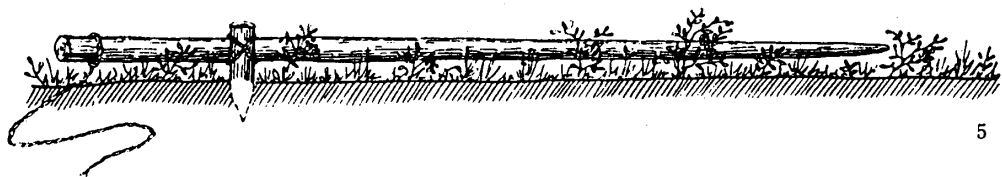
3



4 a



4 b



5

図8 ニズヒの仕掛け罾他 (Takami 1967より)

110) という。また、クロテン猟の川は父系で代々受け継がれるとされ、自己の所有にかかわらない他人の川に括り罾を仕掛ける権利は誰にもなかったともいう (p110)。猟番小屋における山の霊に捧げる儀礼も報告されている (p111)。

7 ウデへの仕掛け弓・罾

ウデへのこの種の装置に関しては図示された例を知らない。しかし A. И. Крушанов 編 (1989) による紹介があるので、それを見ておこう。「狩猟具として普及しているものは、仕掛け弓 (бэй-сигу) であり、それは五つの部分からなっている。つまり、弓 (бэй), 鏃をもつ矢, 台架 (сала), 弓をセットしたところに矢が横たえられ、細い紐で撃鉄が仕掛けられ、その一端は臑で作られた輪 (гоиптини) に留められている。それは台架に取り込まれており、その撃鉄の端は同時に弓矢の弦を保持して仕掛けられている」。そして、このように考慮された仕掛け弓には、獣の大きさによって矢鏃の違いがあるという。すなわち「小型のもの (сэнгми): 毛皮獣 (クロテン, イタチ, キツネなど) を手に入れるためのもので、矢の鏃は二股になっている。中型のもの (поу): ジャコウジカ, ヤギ他の家畜を手に入れるもので、鏃は股になっていないものである。大型のもの (тыга): 大型獣 (エルク, クマ, イノシシ) を獲るもので、矢鏃は細く先の尖ったランセット形である。すべての仕掛け弓は一体構造である」(p29) と説明されている。M. G. Levin と L. P. Potapov 編 (1964) によると、この仕掛け弓の他にも罾などがあるらしい。「過去において、ウデへの経済生活は狩猟と漁労に依存していた。ウデへは満州ジカ, 斑点ジカ, エルク, クマを狩り、毛皮獣としては、彼らはクロテン, アライグマ他を狩猟した。また、彼らはカモ類, エゾライチョウを狩り、小さくはガン, ハクチョウにまで及んだ。…エルクは年中捕獲された。夏には弓と仕掛け弓 (後には鉄砲) で、冬にはイヌを連れてスキーで、槍もしくは鉄砲で獲った。早い段階では弓と矢が用いられた。…ウデへはまた他の肉獣—ジャコウジカ, クマも狩猟した。前者は通り道にセットされた仕掛け弓と括り罾で獲られた。…」(p738) とある。仕掛け弓とその構造は不明であるが、括り罾があるとされている。

8 ナナイの仕掛け弓・罾

I Aa2 タイプ仕掛け弓

ナナイの仕掛け弓に関しては、図9に示した図をもとに A. В. Смоляк (1984) が記載している。「ふつう雪が降る12月の頃、イヌを連れてのクロテンの足跡探しが始まり、罾もしくは『袖』のような小さい網をセットされた穴への追い込みを行う。1月、雪がとくに深く降ると、イヌによる猟はできなくなり、クロテンは各種の押し潰し仕掛けを置いて獲られるが、それは別の毛皮獣 (イタチ, キツネ) にも応用される。アムールには二つのタイプの仕掛け弓が存在するということができる。大型獣を捕獲するための道具は、大きさばかりではない毛皮獣の仕掛け弓の中で区別される。若干の部分 (第一に矢の部分) の構造が違うのである。双方の基本的なタイプはアムール下流の諸

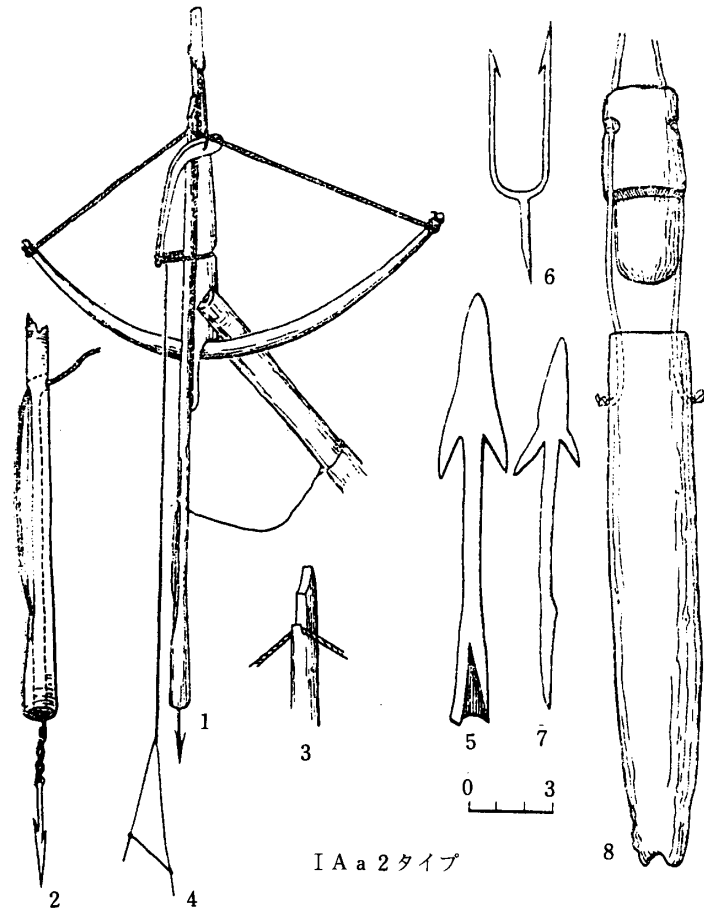


図9 ナナイの仕掛け弓 (Смоляк 1984より)

族に見られるが、各部の名称さえ類似が観察される。それは、ウスリー川河口部からウリチまで、またネギダール地方までさえも観察できるのである（一部サハリンのオロッコまで）。仕掛け弓は、弦を張った弓、銃床からなり、矢を横たえ、引き金のメカニズムつまり撃鉄をもっている。動物の足跡に沿って、細い白い馬毛（*сири*）を張る。獲物がそこを通ると、引き金が作用し、矢が攻撃して獲物を仕留めるように導かれるのである。馬毛の他の端は、ごく小さな撃鉄の上端に結びつけられている。そのような撃鉄に相当する部分（ウリチ、ナナイ：*хумбурпу*、オロチ：*капты*）の存在は、仕掛け弓に特別な『敏感さ』を与える。放たれた矢はまた、注意深い小型獣に接触するのである。大型獣に用意される仕掛け弓は、撃鉄の上端あるいは細い罾紐の上端に警戒糸（馬毛）が飾らずに結び付けられており、垂直の位置に撃鉄を止めている」（p95）といわれる。

図9の各部は次のように説明されている。つまり、1：全体形（矢の長さ80～90cm）、2：矢の構造、3：弦部分の矢の端部、4：道に仕掛けられる白い馬毛、5～7：仕掛け弓の矢（6：クロテン用）、8：仕掛け弓用の木製矢筒（長さ28cm）である。

さらにСмолякは続けている。「毛皮獣の仕掛け弓は、ナナイとウリチは *дэнггурэ* と称している。オロチは *дэнггу* と呼ぶ。それはクロテン用の小型罾の用語で、形態は二股のものである。別

表2 仕掛け弓の用語

仕掛け弓の形態	ツングースカ川, サカチ・アリヤン, ボロニ湖, コンドン村のナナイ	ナイヒン村, ジャリ, ベリゴ, エコニ, ゴリネ・ヌガアンのナナイ, ウリチ	アニュヤ, フンガリのネギダール, ウデツムニンのオロチ
毛皮獣の仕掛け弓	セルミ, セルム ツングースカ川, サカチ・アリヤン, ダダ, ジャリ, ナイヒンのナナイ	デンググレ, デンググ (オロチ) リドギ, エコニ, フンガリ, ベリゴ, シマスのナナイ, ウリチ	セムミ, センム フンガリ, アニュヤのウデヘ
大型獣の仕掛け弓	トィガナ, トルガナ	ウアツ	ツガ

の形態の鏃例えば пинур は、一方が幅広い二本の尖端をもつものである (キツネ用)。弓は паора と呼ばれ、広葉樹のように曲がっている。また、別の種類のウリチのものは手製の гирпи を使用している。仕掛け弓の用語はアムール下流の諸族で種々ある」(p97) として表2を挙げている。

さらに、「ほとんどすべての下流アムールの仕掛け弓の細部の用語は、エヴェンキ語で説明できるものである」(p97) と続けて、表3を示している。

このように、仕掛け弓のタイプは「I Aa タイプ」としか分からないが、ともかく細部の名称が細かに分かれてそれぞれの用語をもつということは、それらの地域におけるこの仕掛け弓の発達を表現しているといえることができる。

なお Levin と Potapov 編 (1964) によると、ナナイの狩猟活動に関しては以下のように説明がある。「アムール住民の中で、とくにナナイは毛皮と肉を狩猟することをひじょうに重要としていた。罠で獲る主たる動物は、リス、クロテン、カワウソ、キツネ、オオヤマネコ、テンであった。肉は、エルク、シベリアジカ、ジャコウジカ、子鹿、イノシシ狩りで手に入れた。罠は、ふつつ夏と冬に持ち出され、肉獣は春と夏にハンティングされた。火器の出現すなわち19世紀前半までは、ナナイの主たる武器は弓と矢、各種の罠、自動弓 [仕掛け弓]、槍であった。…夏には、ナナイはリスとクロテン猟のため遠い地域への長い狩りに出かけた。彼らは、川に氷が来るまで、舟にイヌ、ソリ、スキー、食料、狩猟道具を載せて出かけ、2月か3月になると、冬の道を通って戻ってきた。クロテンを獲る方法にはいくつかがある。つまり、自動弓、押し潰しタイプの罠、くくり罠そして網である。…自動弓は、クロテン以外の他の毛皮獣例えばキツネ、テン、カワウソ、オオヤマネコなどにも用いられた」(pp699-700)。

9 赫哲の仕掛け弓・罠

ナナイは中国側では赫哲 (ヘジェンあるいはホジェン) と呼ばれている。そして凌純聲により参考資料も含めて、いくつかの仕掛け弓・罠が報告されている (凌 1990)。

I Aa 1 タイプ仕掛け弓

表3 仕掛け弓細部の用語

細部	ナナイ						ウリチ	ネギダール	オロチ	アニューヤ のウデ	クリチ・ トウヴリ ノ村のエ ヴェンキ
	ツングース カ川上流～ ハイル村 (1963年)	ツングース カ川上流	ナイヒン, ジャリ, ダ ダ, リドガ	エコニ上流・ 下流	コンドン	ブリ					
弓	ブレ	ブイ, ブリ	ブリ	ブリ	ブリ	ブリ	ベルケン	アラング, ベイ	—	—	バルカン
弦	フリエニ		フリエニ	フレ	イルテ (山羊) フリ (紐)	フリ	イル イルリ	イリ	—	—	—
銃床	サグレカ	サンググリヤ	サグリヤン	サグレ	サグリカ	チャイリカ チャグリヤ	サグラ	チャグリ サラハ	サラ		ロタカイ
別タイプ銃床					ロテカ						
撃鉄	フロヤ	ピメ	ピメン	ピミ	ヘングゲレ	ホヨンゴ ピミ	フユグン	ヒミチェ シムチャ	スムス スムサ		フルグン チルベムケ
矢	ボク	ボオ	ボオ	ボオ	ボオングコ	ボオ	ブオク	ボオコ, タバ(ツ ムニン西方) セングミ・タダ	ボオ		アスコル
矢の内部の紐	イルデ	イルデ	イルデ	—	イルデ	イルデ	—	—	—	—	—
撃鉄の丸い紐	—	—	トンゴルピ	トンゴクペン	トンゴクケ	トンゴルピ	トンゴクペン	トンゴト	—	—	—

図10-1に示したものは、参考資料で通古ス（ツングース）のトラ用の「伏弩」とされるものである。矢鏃は骨製であるらしい。同タイプの2も参考資料で、費雅喀（フェイヤカ＝ニヴヒ）のテングス用のものである。この図は前出の図6-4のニヴヒの「I Aa1タイプ仕掛け弓」に相当するものと考えられる。

I Ab2タイプ仕掛け罠

図10-3はネズミ獲り用の罠で「捕鼠陥機」とされているものである。弓は長さ76cmの竹製で、麻縄の弦をもち、鉄製の長い二股鏃が獲物を仕留める仕組みになっている。同図4もネズミ獲り用罠で、長さ157cmの弓と銅線の弦をもっている。機身はT字形になっておりそれで挟む弓利用の挟殺型装置である。5は弓が縦形に置かれるネズミ獲り罠である。竹製の弓と麻縄の弦をもつが、かなり変形したタイプである。同様に挟殺型である。6もネズミ用の罠である。木製の弓と銅線の弦を有し、箱形の機身である。7はキジ用の罠である。高さ34cmとある。太い弓と太い麻縄の弦に細い弓が二つ組み合わさったものである。中央の細い縦線が支木となっており、挟殺するタイプらしい。

II Ddタイプ仕掛け罠

図10-8に示したものはネズミ獲り用の罠である。斜めの丸太には重量がある鉄あるいは石を縛ることもあり、それで縦の木門を閉めて圧殺させるタイプとされる。以上の他に、ごく単純な三脚のウサギ獲り用の輪罠もあるが、ここでは省略する。

10 ウリチの仕掛け弓・罠

ウリチに関する資料は、残念ながら図を示すことができなかった。出利葉によると、LevinとPotapov編を利用して以下のように説明されている。「ウリチの経済活動において狩猟の重要性は副次的なものであったと前置きしながら、squirrels, sable, marten, otter そのほかの毛皮獣狩猟がおこなわれたことを指摘している（同 [Levin & Potapov ed. 1964のこと] : 722）。そのなかで、とくにsable 狸については、みずからの居住地域のほかサハリンにおいても狸がおこなわれていたことが報告されている（同 : 723）」

また、手塚薫によると「北海道開拓記念館が1992年と1994年に実施した民族調査の重点の一つは毛皮獣狩猟の問題であった。ナナイ、ウリチ両民族の毛皮獣狩猟道具のなかで共通し、しかも数が多いものは仕掛け弓とチェルカンといわれる圧殺式の罠である。前者は聞き取り調査の結果、非常に効率的な道具であり、クロテンなどの小型の毛皮獣からイノシシやシカといった大型獣までを対象とし、矢の先端には鉄鏃を用いるが、矢毒は利用しない点などが明らかとなった。構造的にはアイヌの仕掛け弓と基本的に変わらないが、アイヌの場合、主として木製の鏃とトリカブト毒をセットで用いる点が大きく異なっている。ナナイ、ウリチが毒を用いなかったにせよ、その効率的な狩猟を妨げるものでなかったことは注目に値する。一方、チェルカンはシベリア各地で使用され、エベンキにおいても使用された」（手塚 1995 : 339）と報告されている。

アイヌ自製品の研究—仕掛け弓・罾—

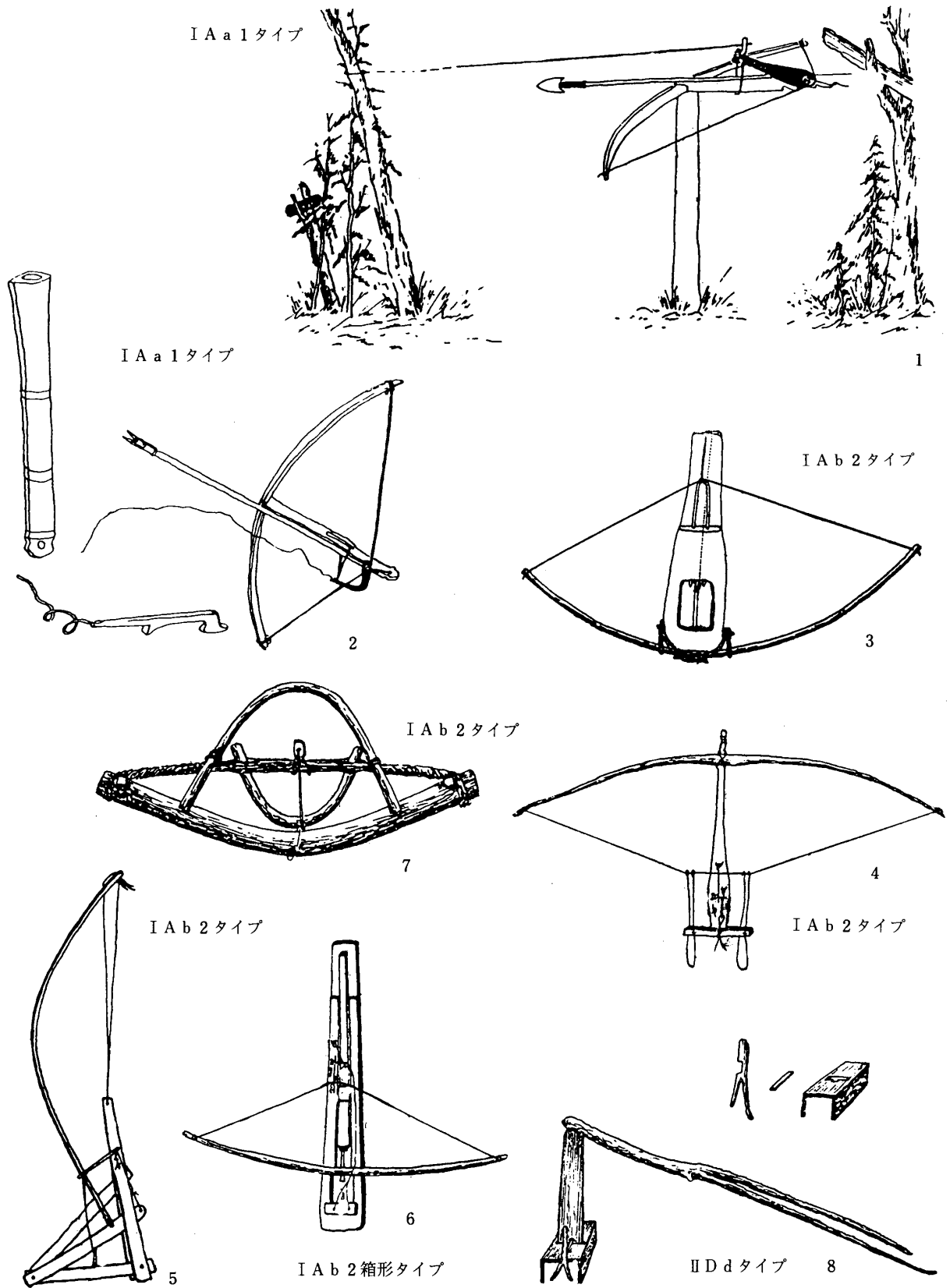


図10 赫哲の仕掛け弓・罾 (凌 1990より)

ここに、ナナイやウリチに「チェルカーン」と呼ばれる前出のニヅヒの「I Ab 2 タイプ」とした縦形仕掛け罠（図6-5）が存在することが理解できる。他の仕掛け罠等については不明である。

11 オロチの仕掛け弓・罠

19世紀中葉以降のオロチのこの種の装置に関しては、B. Г. Ларькин (1964) が紹介している。図11にそれを示しておいた。

I Aa 1 タイプ仕掛け弓

同図-1のものがこのタイプのものである。クマ用のものとされ、その名称は「サモストレル」(самострел=仕掛け弓)という。北海道アイヌなどの場合と構造的に同じものであるといえる。

I Ab 2 箱形タイプ仕掛け罠

同図-2がこれに相当し、毛皮獣の仕掛け罠「カパリ」(капали)とされている。

I Bc タイプ仕掛け罠

同図-3・4がそれである。3は、樺太アイヌのこのタイプのもの（「ホィヌカー」=図4-2）とまったく同じ構造になっており、それは「貂捕罠」であった。ここでは毛皮獣の輪罠「ペトリャ・ロブーシカ」(петля-ловушка)とされている。4は、ジャコウジカ用の輪罠とされているが、同様に枝の弾力を利用したものである。これも樺太アイヌの図4-5の右側に示したものと類似しており、そこではリクンカモイすなわちジャコウジカを捕獲する仕掛け罠と説明されている。ともに、樺太アイヌと共通する点は興味深いところである。

II Dd タイプ仕掛け罠

同図-5~7である。5は、毛皮獣用の圧殺タイプの罠「シピクトーカ」(сипиктока)といわれ、丸太の重みを利用するものらしい。同じく6は「ランギ」(ланги)と呼ばれる罠で毛皮獣用とされる。7はクロテンやイタチ用の罠で、「ドイ」(дои)と称されている。やはり丸太の重力を利用した圧殺装置である。

なお、Ларькинはこのような仕掛け弓、仕掛け罠、輪罠の構造と名称は近隣のウデへ、ナナイ、ウリチに共通すると述べている (p25)。

12 エヴェンキ・オロチョンの仕掛け弓・罠

19世紀末~20世紀初頭のこの種の装置については、A. И. Мазин (1992) の報告がある。

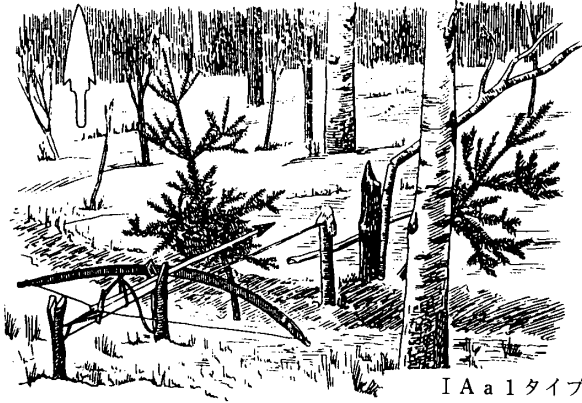
I Aa 1 タイプ仕掛け弓

図12-1がこれに相当する。その説明は有蹄類の仕掛け弓となっている。しかし本文説明では、偶蹄類、クマ、毛皮獣を捕獲するためのもので「ベルケン」(бэркэн)と呼ばれるとされる。さらに、クマ、エルク、ノロ、ジャコウジカ、野生のシカなどの通り道に水平に仕掛けるとされている。

I Aa 2 タイプ仕掛け弓

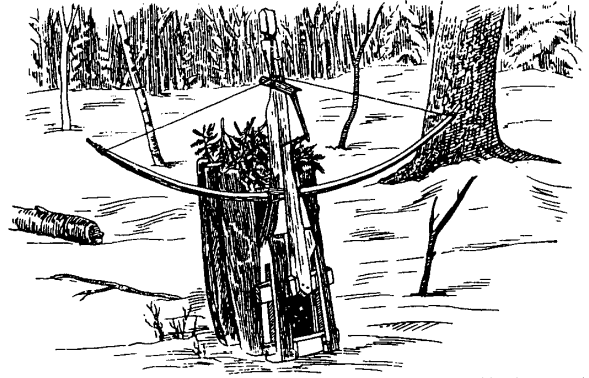
同図-2は垂直に仕掛けられるタイプで、毛皮獣用の装置であるという。ナナイのところで見た

アイヌ自製品の研究—仕掛け弓・罾—



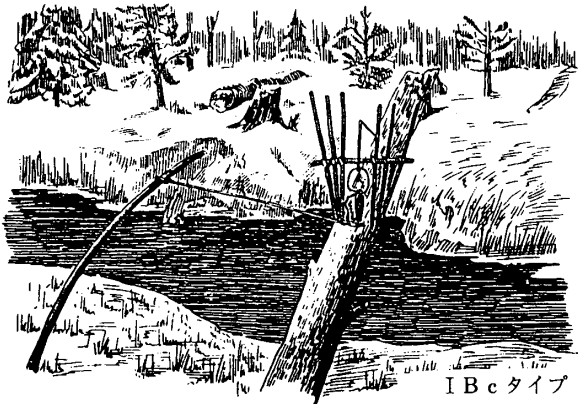
I A a 1タイプ

1



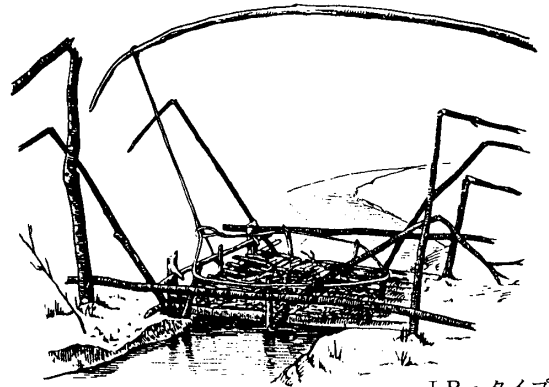
I A b 2箱形タイプ

2



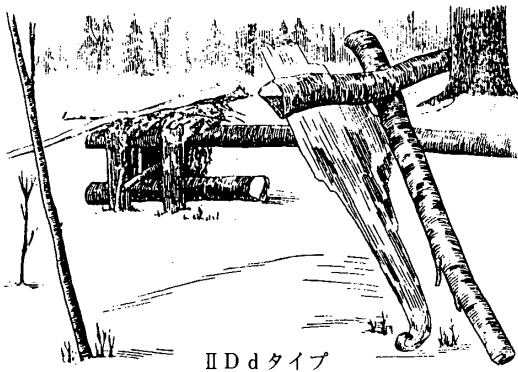
I B cタイプ

3



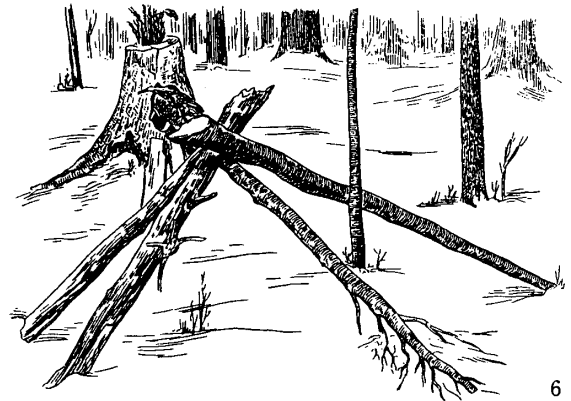
I B cタイプ

4



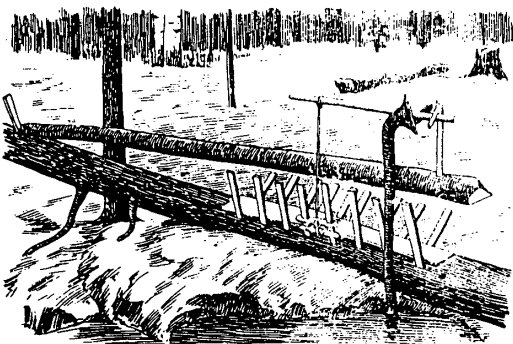
II D dタイプ

5



II D dタイプ

6



II D dタイプ

7

図11 オロチの仕掛け弓・罾 (Ларькин 1964より)

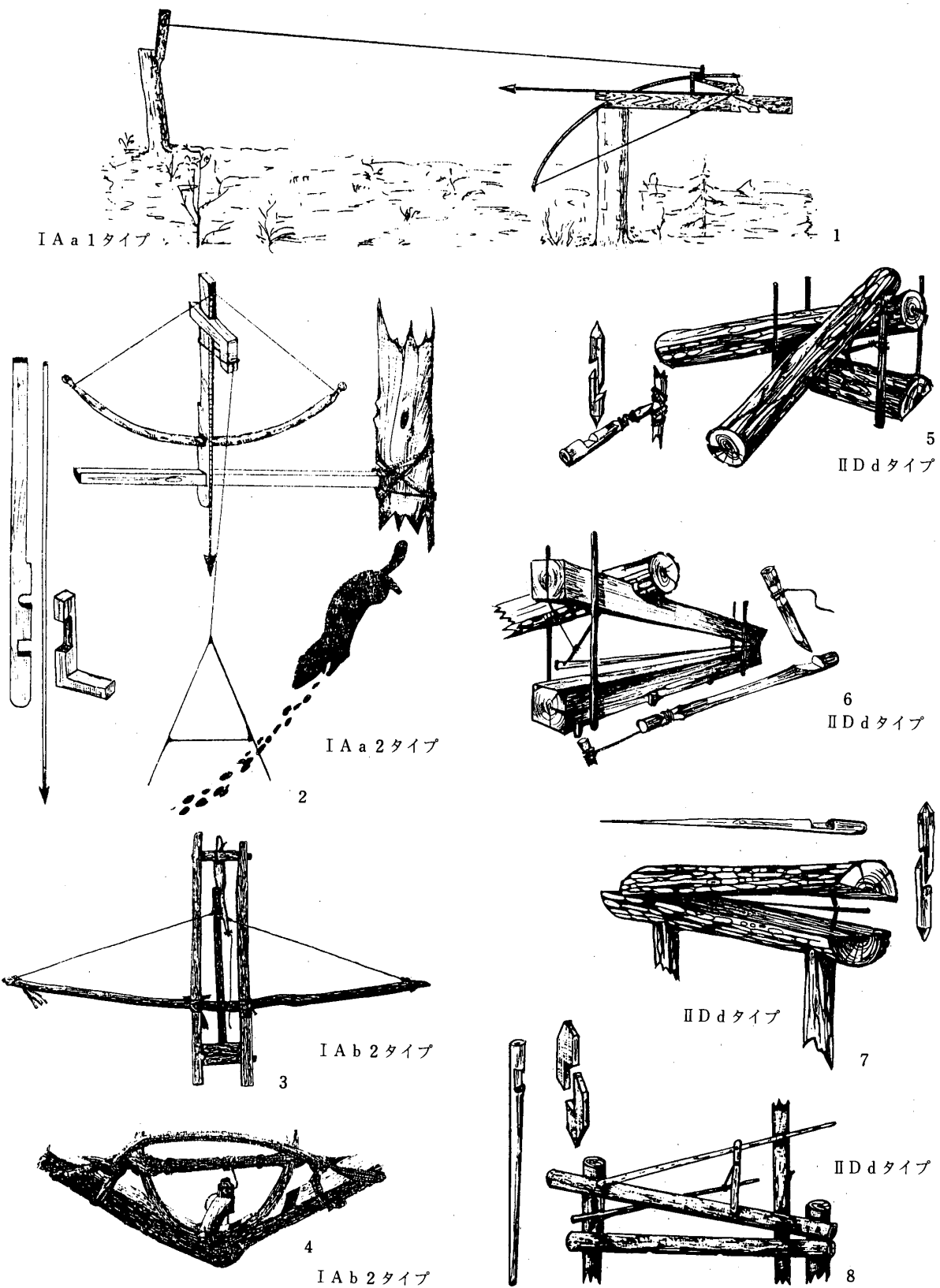


図12 エヴェンキ・オロチョンの仕掛け弓・罾 (Мазин 1992より)

タイプ (図9) と同じ構造である。

I Ab2 タイプ

同図—3・4がこれに相当するが、3はシベリアに広く分布する「チェルカーン」とされるが、エヴェンキ・オロチョンが使用することは珍しいといわれる (p87)。4は自家製の「木罾」とされるものであるが、このタイプの一変形と見ておく。赫哲の図10—7と同じ仕組みと考えられ、オロチョンの場合はリスやイタチ猟のものとされる。

II Dd タイプ仕掛け罾

同図5～8がこれに相当する。5は「クリョームカ」(кулёмка) とされる罾である。あらゆる毛皮獣のものといわれるが、オロチョンはクロテンとイタチ猟にのみ使用するらしい。6は「プロスコーク」(проскок) と呼ばれる罾で「削木」の重力を利用したものである。イタチ用とされる。7は「割木」罾で、「プラーシカ」(плашка) とされるリス用のものである。このプラーシカの変形として、種々の小型動物の捕獲罾に「自動罾」(サモロフ=самолов) があるという。それが図の8であるが、このタイプに属するものとして扱っておく。

ところで、B. A. Туголуков (1969) はエヴェンキの仕掛け弓・罾についてくわしく紹介している。斎藤晨二訳をここに引用しておこう。「獲物を待つ受身の狩猟用具としては、『ベルカーン』と『チェルカーン』…がある。ベルカーンというのは矢がはずれて獣を殺す仕掛け弓である。以前はこれを黒テン猟にも仕掛けたが、これだとまず確実に高価な毛皮を台無しにしてしまった。狩人たちはベルカーンを狩場で作って組立てる。弓にはカラマツの若木の丈夫な木心が使われ矢は白樺で作り、弦はヘラジカの皮か、もっと良いのはジャコウジカの皮で作られた。矢じりはこの場合ほとんど二又になったものであった。…またベルカーンはよく柵と組合せて使われた。柵は野獣が塩をなめにくる塩地とか、水のみ場への通り道に作られた。…この方法でエベンキ人たちはクマを含むすべての大型獣を捕えていた。…チェルカーンも弓だが、弓をバネとして使ったワナ的一种だ。これは狭い木の枠の形をしており、この枠の中には先端に小さい木の板がついた軸棒が入っている。枠にはふつうの弓がとりつけられ、弓の弦に、矢のかわりにその軸棒が結びつけられている。弓の弦をひきしぼる形にすると軸棒の先端の木の板が上方にもち上り、仕掛がかかることになるのである。チェルカーンはイタチとかテンなどの小型獣の猟に使われたが、時には黒テンにも用いられた。チェルカーンはとくに巣穴のそばに仕掛けられ、餌を入れておく。…」(トゥゴルコフ著 1981: 17-18) と説明されている。さらに、前に出てきた「クリョームカ」「プラーシカ」などについても次のように解説されている。すなわち「ロシア人やヤクート人が用いているワナ(クリョーマ)をエベンキ人はほとんど使わなかった。…ウチュル地方のツングースは狐ワナも小型獣用の板ふせ式のワナ(プラーシカ)も使わない…それにもかかわらず、革命の直前頃には、エベンキ人の各集団でも圧殺式のワナ—クリョーマ…やパスチーが狩猟に使われるようになった。狩猟獣の減少でやむなく効率のよいこうしたワナを用いざるを得なくなったのである。狩人たちは、この外来のワナも狩猟場で作った。クリョーマはふつう黒テンやテンに、パスチはリスやオオカミ用に使われた。ク

リョーマもパスチも基本的には同じで、わずかな違いしかない。テン用のもっとも簡単なクリョーマは上下二本の丸太だけでできている。作動の原理は、二本の丸太の向う側の囲いの中の餌をとろうとして上の丸太を支えている板に触れると、上の丸太が獣の上に落下する仕掛である。上の丸太の重量を増すために、場合によってはそれより細目の丸太二本がその上にさらに置かれた。アナグマとかオオカミといったもっと大型の獣の捕獲の場合は、二本の丸太が仕掛けられ、クマ用には各々一〇本からなる二列の丸太を仕掛けた。しかしクマ用のパスチを仕掛ける狩人はあまりいなかった。大変な労力を要しながら、成功するチャンスはあまりに少なかったからである。ウサギやキツネの猟にエベンキ人たちは馬の毛か腱の綱で作った輪のワナを使った。ウサギやキツネの通り道のそばの地面に斜めに棒杭を打込み、その上端から通り道の上に輪を下げておく。獲物が走って来て輪にかかり、あばれて引張れば引張るほど輪が強くしまるのである」(同：18-19)と。

なお、この文章に続く以下の部分をも引用して黒田信一郎(1991：58)は、ツングースの「強制された狩猟」論を展開している。つまり「伝統的な生業(狩猟・トナカイ飼養・漁労)に従事しているエベンキ人の多くは、今でもワナにたよって猟をするのを快よく思っていない。地元の新聞に、時々、クリョーマ、プラーシカ、カプカーンなどを使わないようにとワナ類がヤリ玉にあげられている。こういう獲物を待つ受身の猟具は遊牧、狩猟民の性に合わないらしいのだ」(同：19)ということである。

図13-1に示したものは、トゥゴルコフ著・斎藤訳(1981)に紹介されている「クリョーマ」である。圧殺式で「II Dd タイプ」の仕掛け罠装置である。なお、同じ紹介の中に説明があった輪罠と「チェルカーン」も図示されているが、それは後述するセリクープのものであるので、そこで別

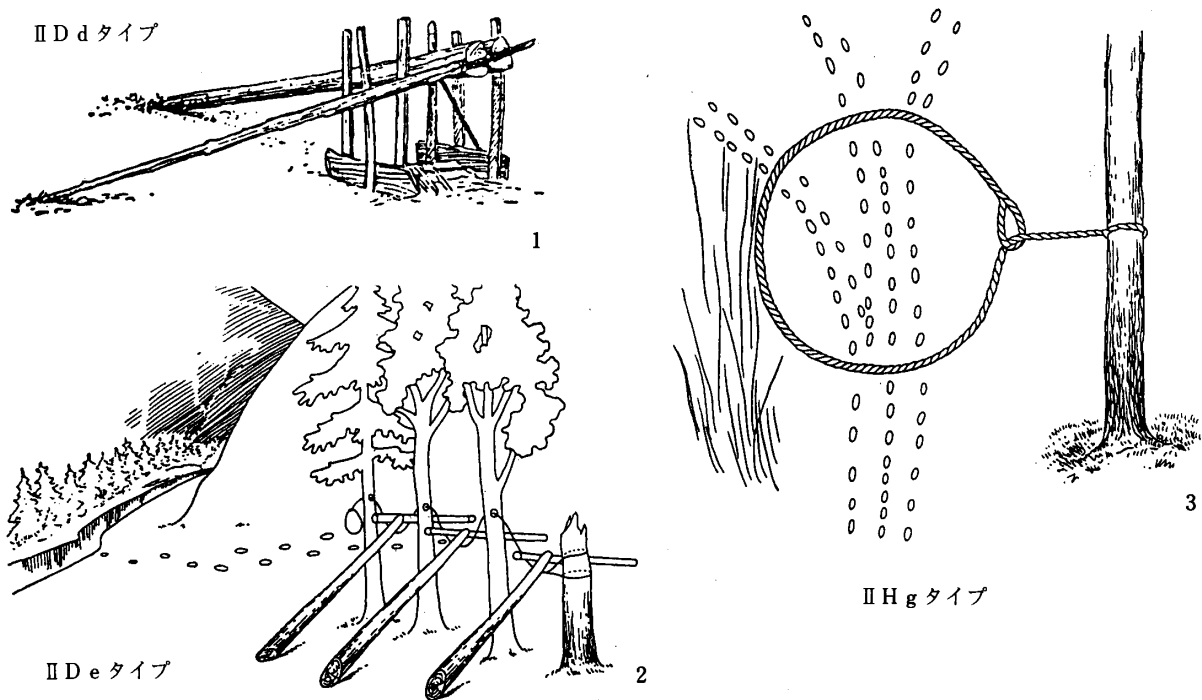


図13 エヴェンキの仕掛け罠(トゥゴルコフ著 1981, Василевич 1967より)

に説明することにする。

他に Г. М. Василевич (1969) によるアムール中流域の左岸支流であるウルミ川のエヴェンキの以下の仕掛け罾が紹介されている。

II De タイプ仕掛け罾

図13-2は、クマ用の輪罾とされるものである。これは、丸太の重みを利用した輪罾であると考えられるので、このタイプに入れておく。ニヴヒの輪罾(図7-1a)とはやや異なる構造であるが、同じ類型として扱っておく。

II Hg タイプ仕掛け罾

同図の3はオオシカ用の輪罾である。通り道に仕掛けるらしいが、詳細は不明である。

13 サハ(ヤクート)の仕掛け弓・罾

Ф. М. Зыковが19世紀~20世紀初頭のサハに関する伝統的な諸道具について報告している(Зыков 1989)。図を引用しながら説明を見ていこう。

I Aa1 タイプ仕掛け弓

図14-1に示したもので、「アィア」(а́йа)とされる仕掛け弓(サモストレール)である。長さ110~120cmの弓サア(саа)とウマの皮をなめしたのものなどによる弦キリス(кирис)をもつ。矢はオスホール(осхор)と呼ばれ、長さ70~80cmである。二股に分かれる鏃をもっているようである。銃床に相当するものはホロルーク(холорук)といわれ、撃鉄に当たる部分はエルベレエク(элбэрээк)とされている。このサモストレールはウサギ、キツネ、エルクに用いられ、稀にクマにも使用されるという。

I Ab2 タイプ仕掛け罾

図14-2は、「チャドチャール」(чадчар)と呼ばれるチェルカーン(チャアルカアン=чаарк-аан)である。テン、イタチ、シマリス他用のものとされている。サルヤナギ製の木枠はシス(сис)、木の弓はチャアチャル(чаачар)、弦はキリス(кирис)、矢の部分の下端はT字形になっており、その下端の板はビルトィサフ(былтысах)と呼ばれている。その両側にはホゾが切ってある。このチェルカーンは、エヴェンキ・オロチョンの前図12-3と同形のタイプである。

II Dd タイプ仕掛け罾

同図-3はウサギ用の罾である。「ソフソ」(сохсо)と呼ばれるこの種の捕獲装置は、ウサギの他にクロライチョウ、オオライチョウなどの鳥類を獲るのにも用いられたらしい。山林の中の広場の一定の場所に長い柵(ブィスィト=бысыт)を設け、ふつう30~40の罾を仕掛けるとされている。丸太による圧殺式の装置で、二本の重し用の丸太シスマス(сисмас)は、長さ1.5m、太さ12~15cmのものを用いるという。

II De タイプ仕掛け罾

同図-4はウサギ用の輪罾とされるもので、「ハンダア・ツサフ」(хандаа тусах)もしくは

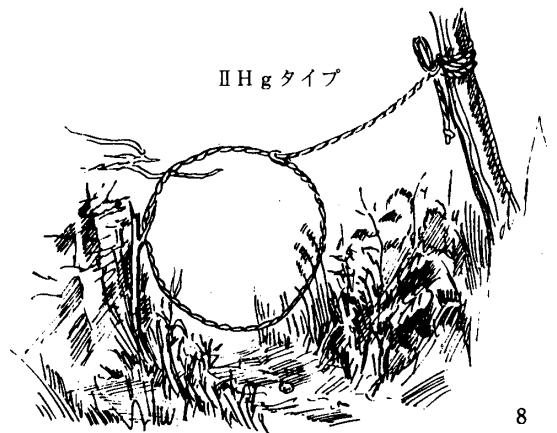
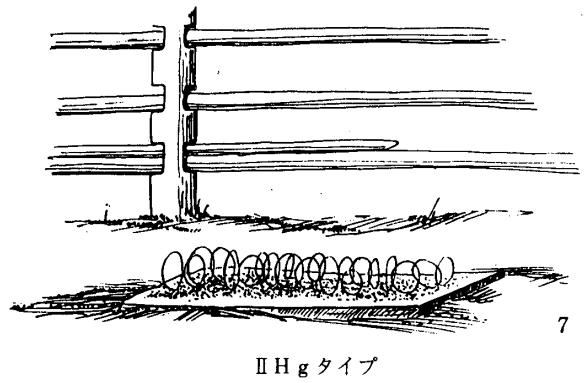
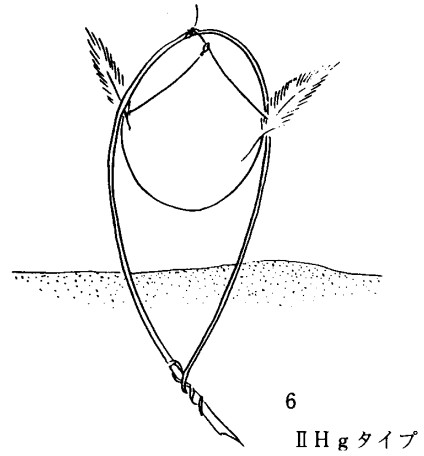
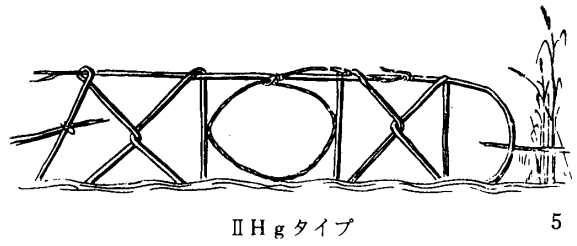
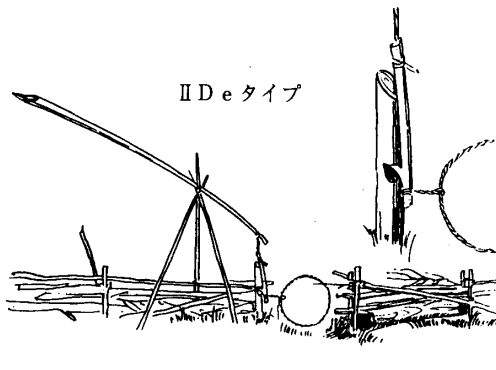
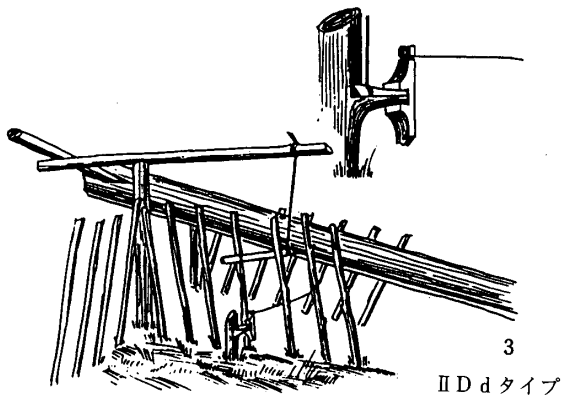
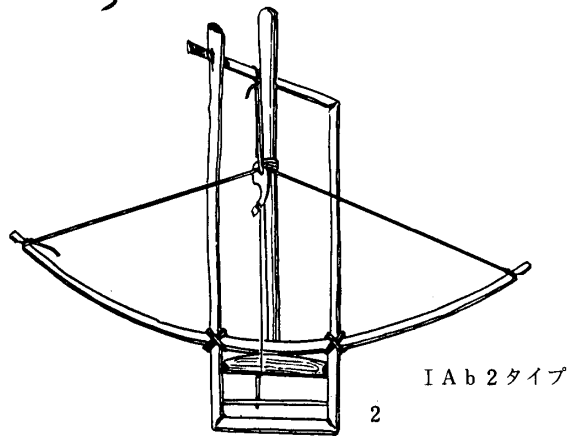
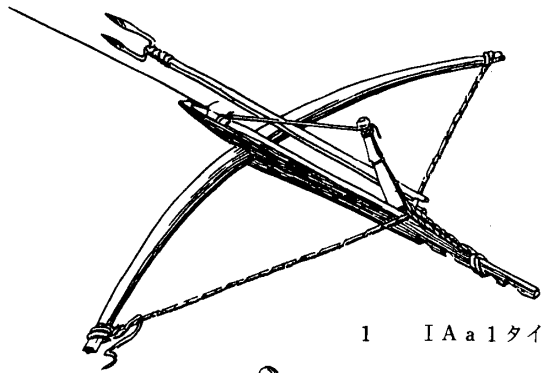


図14 サハの仕掛け弓・罾 (Зыков 1989より)

「テプチルゲ・ツサフ」(тэптиргэ тусах)と呼ばれている。罾に獲物がかかると仕掛けがはずれて吊り上げられるメカニズムになっている。ウマの毛を利用した輪罾で、これも前と同様にクロライチョウやオオライチョウ猟にも用いられるという。

IIHg タイプ仕掛け罾

同図-5はカモ用の罾である。ウマの毛を使った水鳥用の輪罾は「チルゲ」(тиргэ)と呼ばれ、サルヤナギの木を利用した長さ1m以内の図のような格子と輪罾を作る。6はライチョウ用のウマの毛を使った輪罾で、両側に羽毛をつけている。7は「ドグウル」(догуур)と呼ばれる輪罾であるが、これもウマの毛を使っている。板または割材に直径4~5cmの小さな輪罾をたくさんつけている。湖沼にすむ鳥などのものである。8は「ツサフ」(тусах)といわれるウサギ用の輪罾である。

サハの狩猟活動に関して、LevinとPotapov編(1964)はその仕掛けについては多くを触れていない。20世紀初頭に対象となった獲物は、リス、キツネ、ウサギ類、シベリアケナガイタチ、オコジョ、クマ、エルクなどで、それらは中部ヤクーチアで毛皮を取るために冬に獲られたという。またカモ類、ヤマウズラ、エゾライチョウなども捕獲された。北部地域では、エヴェンキ、エヴェン、ユカギールと同様に主にホッキョクギツネ、ウサギ類、トナカイ、エルク、カモ類などを獲っている。狩猟用の各種の罾には、ホッキョクギツネ罾、クマ罾、ウサギや鳥用の毛罾などがあるという。

14 セリクープの仕掛け罾

前にエヴェンキのところで引用したトゥゴルコフ著・斎藤訳(1981:v頁)に紹介されているものが、M. Г. ЛевинとЛ. П. Потапов編(1956)によって報告されているのでここに示しておきたい。

I Ab 2 タイプ仕掛け罾

図15-1に示した「チェルカーン」と呼ばれるテン用の仕掛け罾である。弓の弾力を利用して、T字形の矢部の先端で獲物を挟殺する縦形装置である。基本的に他の諸族の「チェルカーン」と同じである。

IIDd タイプ仕掛け罾

図15-2のものであるが、「クリョーマ」(кулема)と呼ばれるクマ用の丸太利用の圧殺装置である。エヴェンキ・オロチョンのところで出てきた同タイプの「クリョームカ」と対応する言葉であろう。その場合はクロテンとイタチ猟に使用されたというが、ここではクマ猟に使われている。

IIHg タイプ仕掛け罾

図15-3の輪罾である。枝から罾を吊り下げているが、枝の弾力を利用しているようには考えられないので、このタイプに入れておく。ライチョウ、ウサギ猟の輪罾とされている。馬の毛や動物の腱で作った罾という説明がトゥゴルコフ著・斎藤訳(1981)によってなされている。

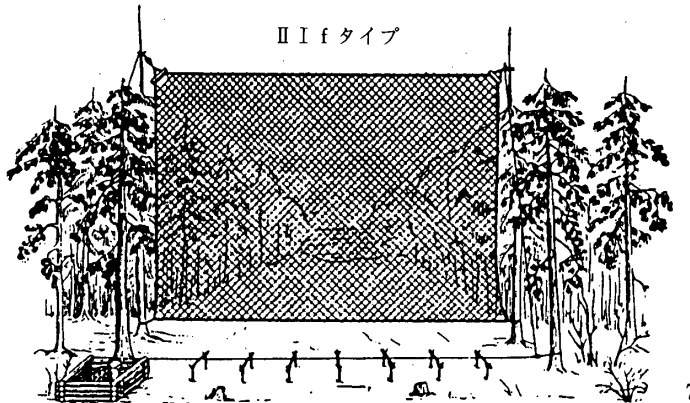
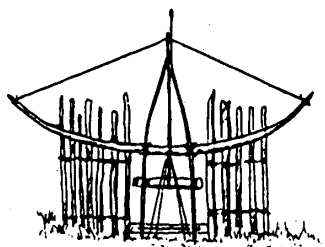
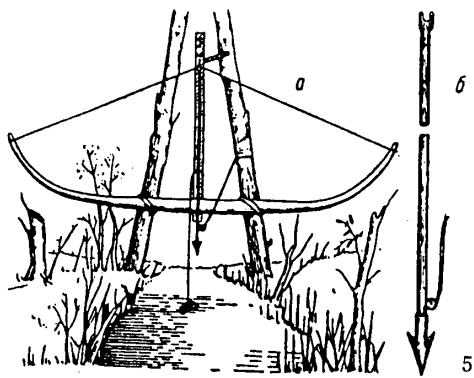
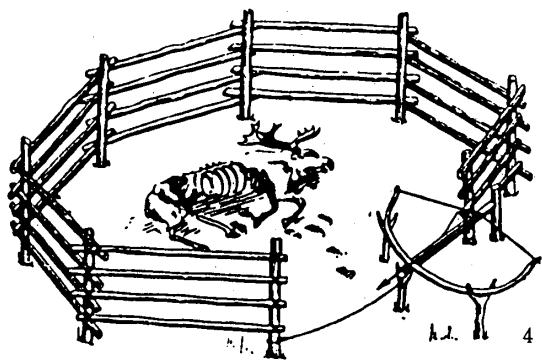
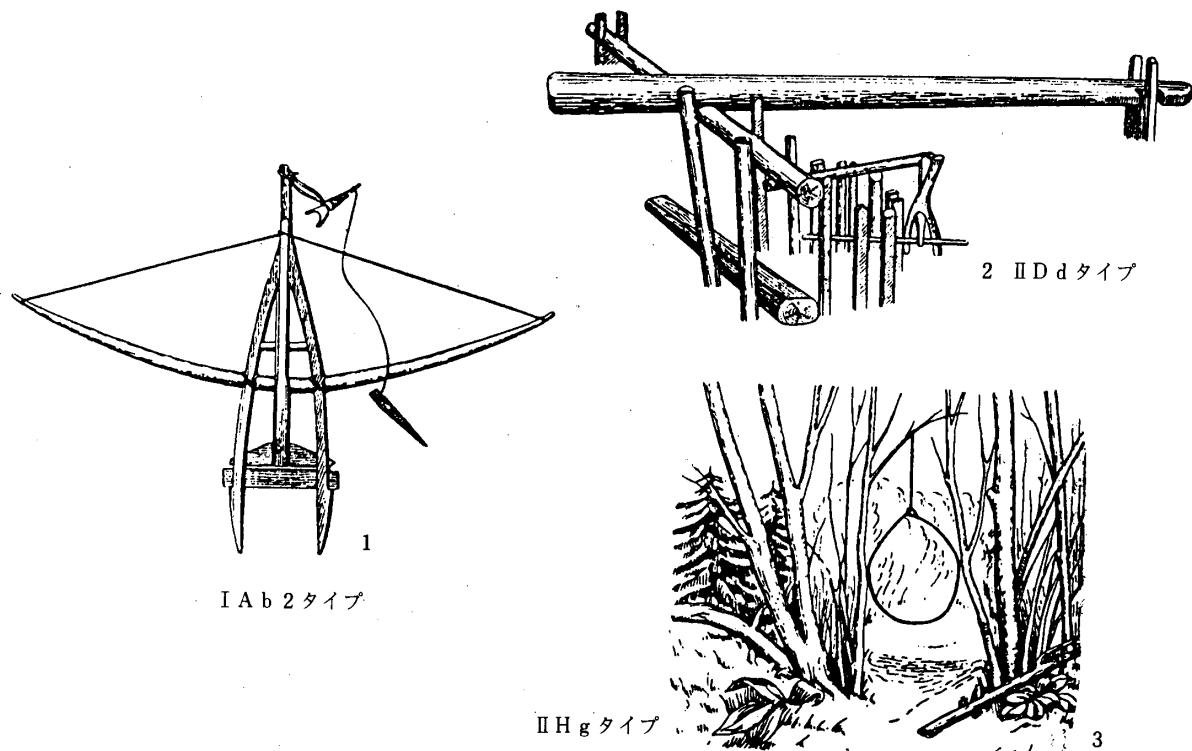


図15 セリクープ，ハンティの仕掛け罠（レVIN 他編 1956，Кулемзин 他 1992より）

15 ハンティの仕掛け弓・罾

Левин と Потапов 編 (1956) によると、以下の図15-4・5・7の装置が紹介され、また В. М. Кулемзин と Н. В. Лукина (1992) は同図6のものを紹介しているので、ここに図を示しておこう。

I Aa1 タイプ仕掛け弓

図15-4は「サモストレール」とされる仕掛け弓である。クマ用といわれ、柵をめぐらし、その中に餌を入れ、柵内に入ろうとすると仕掛け弓が発射されるようになっている。獲物を接近させる方法をとっている。

I Aa2 タイプ仕掛け弓

同図-5は縦置きタイプの仕掛け弓である。カワウソ用のもので、通り道に餌を置き、その餌をとると矢が上から発射される仕組みである。同じく「サモストレール」に入れられる。

I Ab2 タイプ仕掛け罾

6は「チェルカーン」とされる仕掛け罾である。柵を設置してそこに仕掛けている。

II If タイプ仕掛け罾

7は網を使用した罾である。カモ猟に使うものとされる。

なお、Кулемзин と Лукина (1992) によると、他に「サモストレール」の設置法の図があるが割愛する。また、オオライチョウ捕獲のおとし罾の図が示されているが、あまりにも小さいため詳細は不明である。あるいは「クリョーマ」があるともいわれるので、「II Dd タイプ」である可能性もある。柵をめぐらし、その一部に仕掛けている。

16 コリャークの仕掛け罾

鳥居龍藏 (1976b) によると、コリャークの陸上の狩猟は以下のように説明されている。クマ猟はふつう冬の穴籠りの時に捕らえるが、別の方法があるという。つまり「コリャークの倉庫の所に魚をねらいに来る熊を獲るには、頗る強い皮紐で罾を掛けて置いて、熊の来るのを待ち、熊のこれに引っかかるのを捕らえる。けれども彼らの間にはシベリア一般に行われるような熊陥穽は行われない」という。キツネの「狩りの仕方は種々あるが、一般に陥穽で捕らえる」とされる。ホッキョクギツネもアカギツネと同じ方法で獲るといふ。クロテン猟も盛んであるとされるが、狩猟装置の説明はない。テン狩りはサハ(ヤクート)に盛んであってコリャークはあまり多く獲らないとされる。ライチョウは動物の筋の糸で作られた掛蹄で捕らえるという。他にイラクサの糸から編まれた網で鳥を捕らえたりするともある(pp227-229)。いずれの場合も図が示されていないので、残念ながら詳細は不明である。

17 チュクチの仕掛け罾

チュクチに関しては、W. Bogoras (1904) の膨大な研究があり、仕掛け罠も紹介されている。

I Ab 2 タイプ仕掛け罠

図16-1はオコジョ用の自動弓の罠である。おそらくロシアナイズされた原住民からのコピーであろうといわれる。サハの「チャドチャール」と呼ばれる「チェルカーン」(図14-2)と基本的に同形であるので、そのようなことを意味しているのであろうか。T字形の矢部の先端は梓木の溝に沿って上下するという。図に示されたものは長さ64cmとある。

なお鳥居龍藏(1976b)によると、次のように説明されている。彼らは「動物にわなを仕掛けていて、他から来る動物をこのわなにかけて獲った。このわなには弓に槍を番えて仕掛けてあって、動物がこれにかかれば、弓に仕掛けてある槍先があって、それが衝き立つのである。又、彼らはこの他種々のわなをしている」(p174)とされる。この説明では「I Aa 2 タイプ」の仕掛け弓のように受け取れるが、図がなく不明である。しかし、A. ビーハン著(本田彌太郎・伊藤浩夫訳1944)によると、「単純式の木製弓はたとへば小毛皮獣を獲る挟み罠の如き罠を仕掛けるのにも用ひられ、自動発射機にも用ひられる。自動発射機の場合には、弩の場合と同じやうに、弓は矢が置

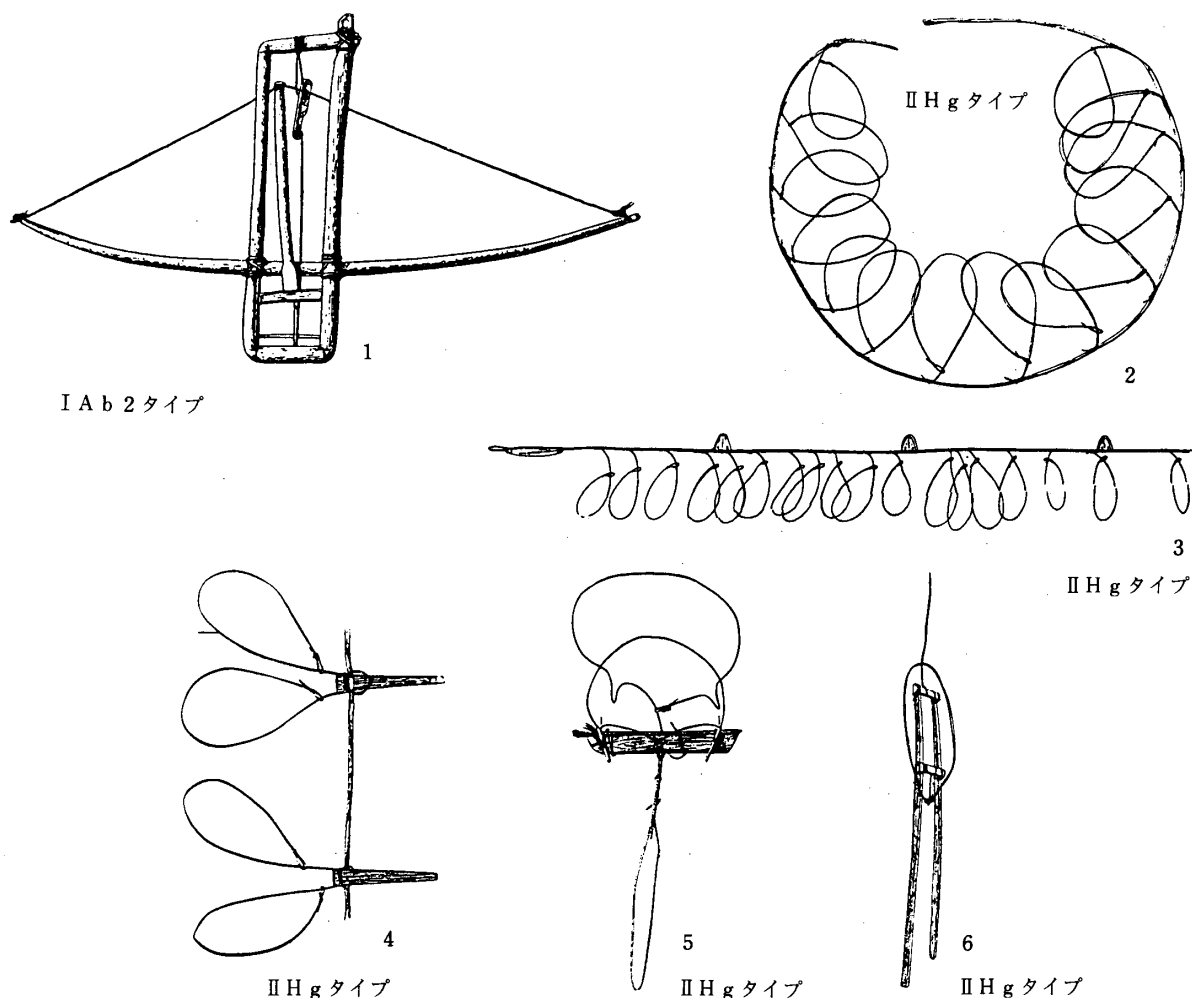


図16 チュクチの仕掛け罠 (Bogoras 1904より)

かれる切り込みのついた支床に固定される。矢は目的の猟獣の大きさによって異なる高さに、しかも致命傷を與へるためには其處を狙はねばならないやうな急所に当るやうに仕掛けられる。発射装置は動物の通路に張られた糸に触れることによって引かれる」(p50)と解説されている。この中で出てくる弓による挟み罾は、「I Ab 2 タイプ」の仕掛け罾と思われる。そして、自動発射機の説明は「I Aa 1 タイプ」の仕掛け弓である。

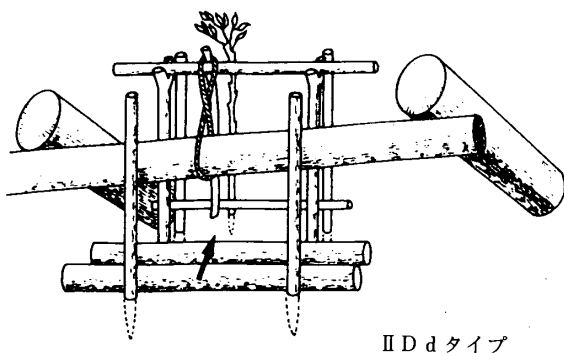
II Hg タイプ仕掛け罾

図16-2~6は海鳥用の輪罾である。その種類はケワタガモ、ウミガラス、ミズナギドリの間である。これらは、クジラの骨や動物の腱で作った紐で作られているという。中でも2はアメリカン・エスキモーのものと同様とされる。3・4は連結タイプで木製のブイをもっているといわれる。

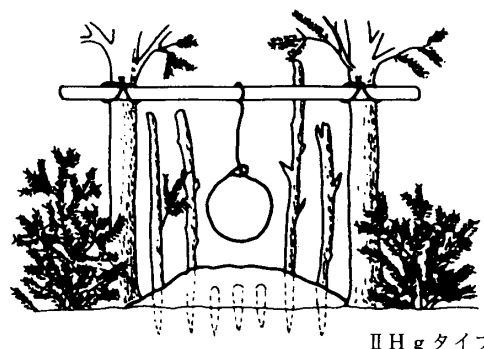
18 西部北方インディアンの仕掛け罾

さらに北米にも仕掛け罾などの広がりを見ることができる。スチュアート・ヘンリ(1991)によると、「典型的な採集狩猟民であった西部北方インディアンはヘラジカなどの動物をとっていたが、中でもカリブーはもっとも大切な獲物だった。冬に…単独で、もしくは少人数で追跡して弓矢で仕留めた。春や秋には…ときには長さ数キロにわたる木の列を築き、追い込みの協同猟が行なわれた。二列の柵が収束する所に追い込まれたカリブーを弓矢でたおすか、所々に設置したくくり罾でとった。クマのような猛獣は落とし丸太罾で捕獲された」(p165)と説明される。「II Dd タイプ」の仕掛け罾(図17左)は「クマなどの大型動物を捕らえる落とし丸太の罾。矢印は首が押えられる所を示す」と説明される。同図右の「II Hg タイプ」仕掛け罾は「獣道を通るウサギの高さに設けられるくくり罾」とされている。

なお、北米とアラスカを中心とする地域の毛皮交易等に関する諸問題については、小谷凱宣(1992)が触れているので参照されたい。



II Dd タイプ



II Hg タイプ

図17 西部北方インディアンの仕掛け罾(スチュアート・ヘンリ 1991より)

19 西シベリア・タタールの仕掛け罾

以上とは地域的に離れるが、西シベリア・タタールのカスム人のものとされる仕掛け罾が紹介さ

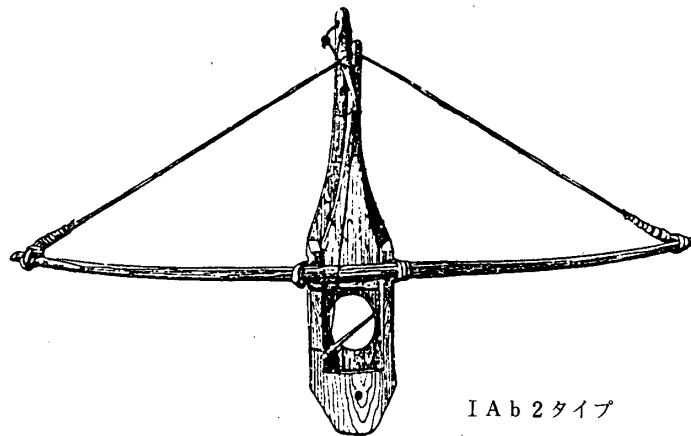


図18 西シベリア・タタールの仕掛け罾（ビーハン著 1944より）

れている（ビーハン著 1944）。図18に示したものがそれであるが、高さ50cmほどである。小毛皮獣を捕獲するための挟み罾とされており、「IAb2タイプ」の仕掛け罾に分類できる。前出の赫哲のこのタイプの一つに類似しているものである（図10-3）。

20 仕掛け弓・罾の類型と拡散

管見の資料でこの問題を扱うことに不安は残るが、知り得た民族資料から以下のような視点を引き出すことができそうである。

まず第一に「IAa1タイプ」とした仕掛け弓であるが、それはやはりやや特殊な構造とメカニズムをもつものであることが分かったが、その広がりも一つの特徴をもっているようである。すなわち、北海道アイヌ、樺太アイヌ、千島アイヌといったアイヌ集団の周辺地域に一つのまとまりが見出せるのである。他にウイルト、ニヴヒ、ウリチ、ネギダール、オロチ、ウデヘ、ナナイ、エヴェンキといったアムールランド周辺の諸族に見られるのである。もちろん、サハ、チュクチ、ハンティなどの飛び地的拡散も見られるが、それは筆者の勉強不足からくるのかも知れない。これらの地域は、基本的には漁労（アイヌ、ウリチ、ナナイ、ハンティ）、狩猟（ネギダール、オロチ、ウデヘ、ニヴヒ、チュクチ：海獣狩猟も含む）、トナカイ飼育あるいは遊牧（ウイルト、エヴェンキ）を行っているところであるが、牛馬牧畜（サハ）といった生業を基本とする地域も含まれている。

次に「IAb2タイプ」の仕掛け罾を見ておく。シベリアでは広く「チェルカーン」と呼ばれているものである。それは北海道アイヌ、ニヴヒ、ウリチ、オロチ、ウデヘ、ナナイ（赫哲）、エヴェンキといった広がりであり、アムールランド周辺地域に一つのまとまりが見られる。さらにサハ、チュクチ、西シベリア・タタール、セリクープ、ハンティにも広がっている。これも基本生業は前者と同様である。西シベリア・タタールは牧畜、セリクープは、漁労を生業の基本にしているようである。

そして、比較的広範囲に拡散しているタイプとして挙げられるのは、「IIDdタイプ」の丸太利

用の圧殺型装置である。ニヴヒ、ナナイ（赫哲）、オロチ、エヴェンキ、サハ、セリクープ、ハンティ、コリャーク？、西部北方インディアンに広がっている。次いで「IIHgタイプ」の輪罾利用の挟み型装置がある。ニヴヒ、ウデヘ、ナナイ（赫哲）、エヴェンキ、サハ、セリクープ、コリャーク、チュクチ、西部北方インディアンなどに見ることができる。

逆に、北海道アイヌにしか確認できなかったものとして、「IBgタイプ」の枝利用の足挟み型装置、「ICbタイプ」の割木利用の挟殺型装置、「IIEdタイプ」の重石利用の圧殺型装置が挙げられるが、これはこの種の仕掛け罾などの発達を意味するものであろうか。さらに、ニヴヒでは他に見られない「IIFfタイプ」の檻利用の丸太小屋罾がある。

次に、各諸族が仕掛け弓・罾の類型をどの程度所有しているかを見ておきたい。ただしこれには民族誌記載の精粗という問題を含んでいるかも知れないが、あえて得られた資料から見ておくことにする。北海道アイヌはかなり多種のものを利用している。すなわち、「IAa1」「IAb2」「同箱形」「IBb」「IBc」「IBg」「ICb」「IIEdタイプ」である。ニヴヒもやや多くをもっている。つまり「IAa1」「IAa2」「IAb2」「IBcタイプ」と「IIDd」「IIDe」「IIFf」「IIGg」「IIHgタイプ」である。他は4～5種の類型を所有している程度である。

以上が、仕掛け弓・罾の類型と拡散の問題について捉えられた大筋である。今後の追求によっては変更を迫られるかも知れないが、一応の結論を述べておいた。

21 仕掛け弓・罾と対象物

先ほど各諸族の基本生業の問題に軽く触れておいたが、それはこの種の装置を考える上でかなり重要な問題を含んでいる。そこで、対象となる捕獲動物について見ておくことにする。

この問題については、出利葉浩司（1995）がこれらの地域の小型毛皮獣に注目することによって言及している。氏のいう「HA-1類型」すなわち本論の「IAa1タイプ」仕掛け弓に注意をはらっている。すなわち北海道アイヌでは、そのタイプはクマ、シカ猟に用いられるが、他の諸族においてはキツネなどの小型獣狩猟によく使用されているとされる。ここで、これまでに得られたこのタイプでの記録された獲物を再度整理してみると、

北海道アイヌ：クマ、シカ、タヌキ、ウサギ、ネズミ

樺太アイヌ：クマ、トナカイ、キツネ、テン、ウサギ

千島アイヌ：種不明であるが陸上動物

ウィルタ：キツネ、カワウソ、テン

ニヴヒ：クマ、キツネ、テン

ウデヘ：クマ、イノシシ、ジャコウジカ、エルク、ヤギ、キツネ、クロテン、イタチ

ナナイ：イノシシ、シカ、キツネ、オオヤマネコ、クロテン、テン、カワウソ（「IAa2タイプ」を含むことが考えられる）

ウリチ：イノシシ、シカ、クロテン

オロチ：クマ

エヴェンキ・オロチョン：クマ， エルク， ノロ， ジャコウジカ， クロテン， 毛皮獣

ツングース（エヴェンキ）：トラ

サハ：クマ， エルク， キツネ， ウサギ

ハンティ：クマ

チュクチ：小毛皮獣

となっている。以上のように，大型獣から小型毛皮獣までを捕獲対象としていることが分かる。むしろ，小型毛皮獣のみを対象にした仕掛け弓は「I Aa 2 タイプ」のもので，

樺太アイヌ：カワウソ

ニヴヒ：テン

ナナイ：クロテン， テン， キツネ， カワウソ， オオヤマネコ

ハンティ：カワウソ

を捕獲対象にしている。

また「チェルカーン」タイプの「I Ab 2 タイプ」装置は，

北海道アイヌ：カワウソ， テン， イタチ， キツネ， タヌキ， ノウサギ

ニヴヒ：クロテン， テン， カワウソ？

ウデヘ：ネズミ

赫哲：ネズミ， キジ

オロチ：毛皮獣

エヴェンキ：イタチ， テン， クロテン， リス

サハ：テン， イタチ， リス

セリクープ：テン

チュクチ：小毛皮獣， テン

西シベリア・タタール：小毛皮獣

を獲っている。ネズミとキジを除いてはやはり小型毛皮獣をその捕獲対象にしていることが理解できる。よってこれも特殊な装置と考えることができるであろう。

このように見てくると，「I Aa 1 タイプ」の仕掛け弓は北海道においては主にクマ，シカ猟に用いることと，そのタイプの北海道アイヌを中心とする一つの広がりには，「仔グマ飼育型」のイオマンテを連想させる。アムールランド，サハリン，北海道といった地域におけるそのイオマンテは一つの完成された集約を見せているともいわれる。そして，渡辺仁による「クマ祭文化複合体」（渡辺 1972：48）には，それに不可欠の道具として「アマッポ」が挙げられている。筆者も考古学から見た「アイヌ文化複合体」を考え，その中にイオマンテにつながるものとして，またアイヌ自製品として重要な位置を占める「仕掛け弓」を位置づけている（宇田川 1988：361）。このような特殊な局地的文化形成にこのタイプの仕掛け弓が寄与していたことも考えられる次第である。

結びにかえて—考古資料の発掘—

以上、とくに陸獣を主体とした仕掛け弓・罌について北方諸族の類型を概観し、その広がりや捕獲対象物としての獲物などを見てきた。やや煩雑になったが、各類型の各族の名称などを細かく見てきたり、部分名称も見てきたのは、その装置に対する各住民の生活の中での位置づけを考慮したかったからである。

ところで、オホーツク文化に関する近年の研究で「オホーツク文化の集団は船着き場として適していた場所や環境を意図的に選択し、特に後期になると大型船の停泊場所としての立地条件を考慮してたことがうかがえる」とする意見が出てきている（右代・赤松 1995:171）。そして大陸や本州との「交易」の活発化とも関連させて考えられている。また、8～12世紀にはすでに大陸から日本に達する長大な「クロテンの道」があったとする仮説もある（シャフクノフ 1992）。さらに明・清代のテン皮などの交易経済の発達もくわしく紹介されている（丹治 1995）。

また最近、佐々木史郎（1991, 1992a）によってこれら北方地域の文化類型と文化領域論が展開され、「生業・文化基本類型」と「経済・文化類型」の再構成の必要性が考慮されているが、それに対する一つの資料が提供できれば幸いである。さらに同じく佐々木史郎（1992b）は北海道・サハリン・アムール川下流域における毛皮および皮革利用を論じている。その中で「この地域で捕れる動物の毛皮は原住民の生活必需品として彼らの間で消費されるだけでなく、周辺の諸民族にも珍重され、重要な交易品にされた。特に美しい毛並みをもつテン、クロテン、カワウソ、キツネ、リスなどの陸上の毛皮獣と海獣のラッコ、オットセイ、アザラシ類などの毛皮は、中国の宮廷や上流階級にもてはやされ、この地域の特産物として献上品の代表とされてきた」（p129）とされているが、皮革処理専用のスクレイパーにも注目している。詳細は割愛するが、ツングース型、西シベリア型、東シベリア型に分けられ、その分布も考えている。これらの資料は考古学的にも分析の対象となるものであり、本論で問題にしたような道具類とも関連してくるものであろう。いずれ総合的な研究が行われることを期待したい。

ところで、この種の装置の部品について考古学資料はないのであろうかという疑問が登場する。仕掛け弓の弓に相当する資料は断片的ではあるが、確認されているが、それが仕掛け弓のものであるという確証はない。しかし、引き金に相当する「く」の字形のトリガー（図1-3）は骨製ならば残り得る可能性があるものである。その図では、基部は紐で結ばれて弦が引っかけられるようになっているが、北海道アイヌを始めとして、その基部には穴をもつことが多いようである。長さは15cmくらいである。そこでこの特殊な「く」の字形をした考古資料を求めてみたい。とりあえず、骨角器を多く出土しているオホーツク文化の遺跡からそれを求めておく。図19にそれを示しておいた。

1は、礼文町香深井A遺跡2号住居址床面出土のものである（大場・大井編 1981:238）。ヒグマの陰莖骨製で長さ14.8cmの未詳品とされるものである。一端に円形の貫通孔を穿っているもの

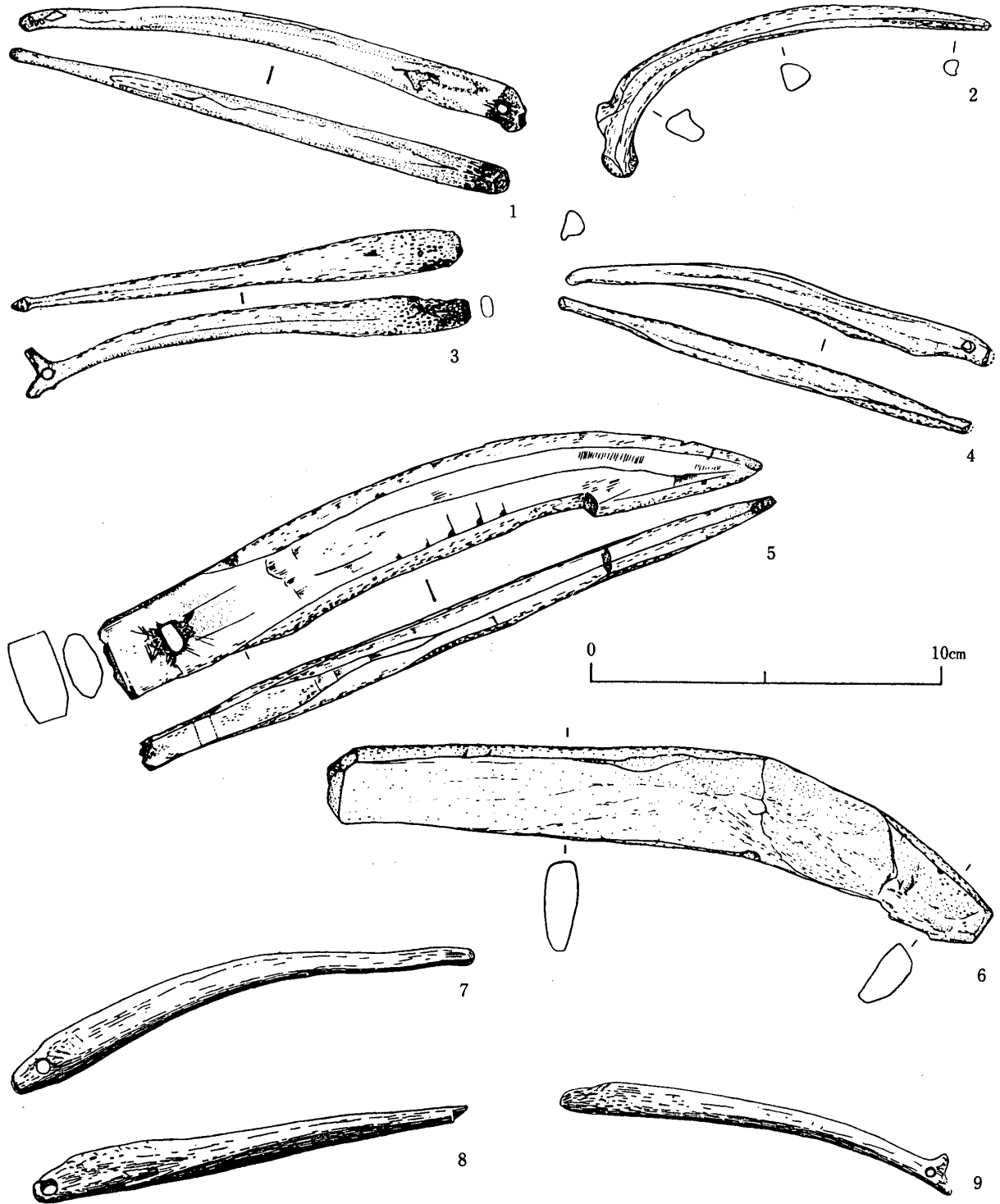


図19 オホーク文化の骨製品 (大場・大井編 1976・1981, 大場 1955より)

で、全面やや滑沢を帯びるが、他に加工はないとされている。2は、同遺跡1号a住居址埋土出土品である (大場・大井編 1976:447)。錐として報告されているが、陸獣の肋骨を利用したもので、尖頭部を作り出す以外は加工がないという。基部に相当する図の左側は紐の装着に適したものと考えることもできるものである。長さ12cmほどである。3は、同遺跡の攪乱・排土出土のもので

ある（大場・大井編 1976：162）。オットセイの陰茎骨の特徴ある叉状部に丸い穴を穿ったものである。他に加工痕がない未詳品である。長さ12.8 cmである。4は、同遺跡魚骨層Ⅲ出土のものである（大場・大井編 1976：658）。ヒグマの陰茎骨を利用し、基部に穿孔している未詳品である。長さ12 cmであろう。5は、同遺跡間層Ⅲ／Ⅳ出土のものである（大場・大井編 1981：52）。これは他に類例を見ない特異な形態の釣針鉤とされているもので、基部に穿孔がある。クジラの骨利用で、長さ19.2 cmという。6は、同遺跡1号d住居址埋土出土である（大場・大井編 1976：733）。海獣骨利用の釣針鉤の未成品とされているが、研磨痕を残し、薄手に作られていることから、トリガーの可能性を残すものである。長さ18.7 cmとされる。7～9は、網走市モヨロ貝塚出土のものである（大場 1955：232）。動物の陰茎骨利用で、一端に穴が穿たれている。陰茎骨垂飾とされている。7の長さは14.0 cmである。

以上であるが、他にも類例は見出すことができるであろう。大きさと「く」の字形に曲がるという特性から、以上を示しておいたが、ヒグマやオットセイの陰茎骨の形態の特徴から、それによる遺物が多いようである。これらがこの種の仕掛け弓装置のトリガーであるとは断言するつもりはないが、アイヌ自製品の研究の一つの仮説として、ものの見方・考え方を述べておいた次第である。

アイヌに特殊な毒窩をもつ矢尻とは別に、同様に特殊な形態・構造の「I Aa1タイプ」の仕掛け弓「アマクー」あるいは「I Aa2タイプ」の縦形仕掛け弓の北方地域における広がりについて考察を加えてきたが、その矢尻と仕掛け弓には異なる分布が認められた。それは、毛皮利用と交易という商品流通の経済的側面が大きく関係しているからという想定がなされてよいように思われる。本論では言及できなかった次の研究ステップへの資料を提供できたものであれば幸いとすところである。

なお、英文の動物名に関しては、内田享監修『谷津・内田動物分類名辞典』（中山書店、1990）を参考にした。

文 献

- 安斎正人・佐藤宏之（1993）「マタギの土俗考古学」『古代文化』45-11：15-26
 バチラー、ジョン著（1995）『アイヌの伝承と民俗』（安田一郎訳）青土社
 ビーハン、A. 著（1944）『外郭アジアの民族と文化』（本田彌太郎・伊藤浩夫訳）彰考書院
 出利葉浩司（1995）「狩猟具からみた北海道アイヌおよび北東アジア諸民族の小型毛皮獣狩猟活動の意味」
 『北の歴史・文化交流研究事業研究報告』北海道開拓記念館：305-331
 洞 富雄・谷澤尚一編注（1988）『東韃地方紀行他』東洋文庫，平凡社
 池上二郎（1982）『ウイльтаの暮しと民具』昭和56年度ウイльта民俗文化財緊急調査報告書(4)，北海道教育委員会
 葛西猛千代（1943）『樺太アイヌの民俗』樺太文化振興会
 加藤九祚（1986）『北東アジア民族学史の研究』恒文社
 川村秀彌（1942）「邦領樺太オロッコ・ギリヤークの狩猟並に漁撈習俗資料」『民族学研究』8-1：63-72
 萱野 茂（1978）『アイヌの民具』すずさわ書店

- 北構保男訳 (1978)『明治23年 A. H. サベージ・ランドーアひとり蝦夷地をゆく』根室市
小谷凱宣 (1992)「北方民族と毛皮交易」『北の人類学』アカデミア出版社: 107-131
黒田信一郎 (1991)「強制された狩猟—ツングース系諸族のコスモロジーとの関連」『北方の狩猟儀礼』第5
回北方民族文化シンポジウム, 北方文化振興協会: 52-62
クレイノヴィチ, E. A. 著 (1993)『サハリン・アムール民族誌—ニヴフ族の生活と世界観—』(柘本哲訳)
法政大学出版局
浪川健治 (1992)『近世日本と北方社会』三省堂
名取武光 (1972)「北大附属博物館所蔵アイヌ土俗品解説」『アイヌと考古学(1)』北海道出版企画センター:
57-103
西鶴定嘉 (1942)『樺太アイヌ』樺太文化振興会
大場利夫 (1955)「モヨロ貝塚出土の骨角器」『北方文化研究報告』10: 173-249
大場利夫・大井晴男編 (1976)『香深井遺跡(上)』東京大学出版会
大場利夫・大井晴男編 (1981)『香深井遺跡(下)』東京大学出版会
大友喜作編 (1944)『北夷談・北蝦夷凶説・東蝦夷夜話』北門叢書 5, 北光書房
凌 純聲 (1990)『松花江下游の赫哲族』上海文芸出版社
佐々木史郎 (1991)「アムール川下流域とサハリンにおける文化類型と文化領域」『国立民族学博物館研究報
告』16-2: 261-309
佐々木史郎 (1992a)「シベリアの生態系と文化」『北の人類学』アカデミア出版社: 133-160
佐々木史郎 (1992b)「北海道, サハリン, アムール川下流域における毛皮及び皮革利用について」『狩猟と
漁労』雄山閣: 122-151
佐藤宏之・安斎正人 (1955)「東北マタギの罾猟と狩猟行動に関する土俗考古学的研究」『日本考古学協会第
61回総会研究発表要旨』: 41-44
シャフクノフ, E. V. (1992)「12世紀および13世紀初葉の Sable Road (黒テンの道) 沿線の中央アジア,
沿海州地域の人々の通商活動に関する新知見」『1991年度北の歴史・文化交流研究事業中間報告』北海
道開拓記念館: 51-59
スチュアート・ヘンリ (1991)『北アメリカ大陸先住民族の謎』光文社
丹治輝一 (1995)「明清時代中国東北部の交易経済の発達と貂皮」『北の歴史・文化交流研究事業研究報告』北
海道開拓記念館: 219-244
手塚 薫 (1995)「アムール川流域におけるナナイとウリチの象徴表現」『北の歴史・文化交流研究事業研究
報告』北海道開拓記念館: 333-344
トゥゴルコフ, B. A. 著 (1981)『トナカイに乗った狩人たち—北方ツングース民族誌』(齊藤晨二訳) 刀
水書房
鳥居龍藏 (1976a)「考古学民族学研究・千島アイヌ」『鳥居龍藏全集』5, 朝日新聞社: 312-553
鳥居龍藏 (1976b)「極東民族」『鳥居龍藏全集』7, 朝日新聞社: 99-317
右代啓視・赤松守雄 (1995)「オホーツク文化遺跡の分布とその特性」『北の歴史・文化交流研究事業研究報
告』北海道開拓記念館: 157-179
宇田川洋 (1988)『アイヌ文化成立史』北海道出版企画センター
宇田川洋 (1994)「アイヌ自製品の研究—矢尻—」『東京大学文学部考古学研究室紀要』12: 75-111
渡辺 仁 (1972)「アイヌ文化の成立」『考古学雑誌』58-3: 47-64
山本祐弘 (1970)『樺太アイヌ・住居と民具』相模書房
Batchelor, J. (1892) The Ainu of Japan. London.
Batchelor, J. (1901) The Ainu and Their Folk-Lore. London.
Bogoras, W. (1904) The Chukchee Part I. Memoirs of the American Museum of Natural History.

New York.

- Levin, M. G., Potapov, L. P. (1964) The Peoples of Siberia. Chicago.
- Ohnuki-Tierney, Emiko (1974) The Ainu of the Northern Coast of Southern Sakhalin. New York.
- Василевич, Г. М. (1969) Эвенки. Ленинград.
- Зыков, Ф. М. (1989) Традиционные Орудия Труда Якутов (XIX—начало XX века). Новосибирск.
- Кулемзин, В. М., Лукина, Н. В. (1992) Знакомьтесь: Ханты. Новосибирск.
- Крушанов, А. И. (ред.) (1989) История Культура и Удегейцев. Ленинград.
- Ларькин, В. Г. (1964) Орочи. Москва.
- Левин, М. Г., Потапов, Л. П. (ред.) (1956) Народы Сибири. Народы Мира. М—Л.
- Мазин, А. И. (1992) Быт и Хозяйство Эвенков—Орочонов. Новосибирск.
- Смоляк, А. В. (1960) Заметки по этнографии нивхов амурского лимана. ТИЭ56: 92-147.
- Смоляк, А. В. (1984) Традиционное Хозяйство и Материальная Культура Народов Нижнего Амура и Сахалина. Москва.
- Таксами, Ч. М. (1967) Нивхи. Ленинград.
- Туголуков, В. А. (1969) Следопыты Верхом на Оленях. Москва.

追記

И. Е. Тугутов (Материальная Культура Бурят. Улан-уде, 1958: 48)によると、ブリャートにも古い時代にはペアリ (паали) と呼ぶサモストレールがあったと記録されている。追加しておきたい。また、Лопатин, И. А. の報告 (Гольды-Амурские, Уссурийские и Сунгарийские-. Владивосток, 1922) に、リス用の I Aa 2 タイプのサモストレールが図示されている (図38)。ゴルジはナナイのことであるが、本論図9と同じメカニズムのものである。

Spring-bows and Hunting-traps :
a study of objects of Ainu manufacture

Hiroshi UTAGAWA

Until recently, the Ainu had a special type of bow for animal hunting named the "spring-bow" or "self-firing bow". It was an object of Ainu manufacture. In this paper I consider the ethnographic examples of spring-bows and hunting-traps spread over the Ainu of Hokkaido, Sakhalin and the Kurile islands and the peoples of the northern areas neighboring Hokkaido.

I recognized several types of spring-bows and hunting-traps of northern peoples. The classification in Table 1 is based on the study of K. Deriha (1995). In this table, "I" denotes power by elasticity of wood, "II" uses another source of power. "A" uses elasticity of the bow, "B" uses elasticity of branch, "C" uses elasticity of a dividing log, "D" uses gravity of a log, "E" uses the gravity of a stone, "F" uses a log cage, "G" uses forked tree, "H" uses noose, "I" uses a net. From "a" to "g" are the methods for killing or capturing the animal: "a" is shooting dead by an arrow, "b" is squeezing to death between tips or woods, "c" is strangulation by a noose, "d" is crushing to death by logs or stones, "e" is hanging by a noose, "f" is capturing by trap or the net, "g" is catching between forked tree or tips of wood. "1" is horizontal set of bow and "2" is vertical. And so I call the types of spring-bows and hunting-traps "I Aa 1", "I Aa 2", "I Ab 2", "I Bb" and "II Dd" type and so on.

In these spring-bows and hunting-traps of northern ethnic groups, I can show the most special one is "I Aa 1" type by its own mechanism. This type spread over the peoples of Hokkaido Ainu (Fig. 1), Sakhalin Ainu (Fig. 4-1), Kurile Ainu, Ul'ta, Nivkhi, Ul'chi, Negidals, Orochi (Fig. 11-1), Udegeys, Nanays, Evenks (Fig. 12-1), Sakha (Yakuts, Fig. 14-1), Chukchi and Khanty (Fig. 15-4). And I can examine the next specialized type "I Ab 2" called "cherkan" by the groups of Siberia spread over Hokkaido Ainu (Fig. 2), Nivkhi (Fig. 6-5), Ul'chi, Orochi (Fig. 11-2), Udegeys, Nanays, Xozen (Fig. 10-3~6), Evenks (Fig. 12-3), Sakha (Fig. 14-2), West-Siberia Tatars, Sel'kups (Fig. 15-1) and Khanty (Fig. 15-6).

Next to these types, the "II Dd" type which uses the gravity of the log to crush the

animal to death spread amongst the Nivkhi, Nanays, Xozen, Orochi, Evenks, Sakha, Sel'kups, Khanty, Koryaks (?) and West-Northern Indians. And next "IIHg" type using a noose could be seen amongst the Nivkhi, Udegeys, Nanays, Xozen, Evenks, Sakha, Sel'kups, Koryaks, Chukchi and West-Northern Indians.

And so we point out that the Hokkaido Ainu possessed many types of those spring--bows and hunting-traps: "I Aa 1", "I Ab 2", "I Bb", "I Bc", "I Bg", "I Cb" and "II Ed". The Nivkhi had several types such as "I Aa 1", "I Aa 2", "I Ab 2", "I Bc", "II Dd", "II De", "II Ff", "II Gg" and "II Hg". The other peoples possessed only 4 or 5 types.

Bears, deer, raccoon dogs, hares and rats were hunted by the "I Aa 1" type spring--bow by the Hokkaido Ainu. Using the same spring-bow Sakhalin Ainu hunted bears, reindeers, foxs, martens and hares, the Ul'ta foxs, otters and martens, the Nivkhi bears, foxs and martens, the Udegeys bears, wild boar, musk-deer, elks, goats, foxs, sables and weasels, the Nanays wild boar, deer, foxs, leopard cats, sables, martens and otters, Ul'chi wild boar, deer and sables, the Orochi bears, the Evenks (Orochon) bears, elks, roa deer, musk-deer, sables and fur-bearing animals, the Sakha bears, elks, foxs and hares, the Khanty bears, and the Chukchi small fur-bearing animals. As a result we can find a range from large animals to small fur-bearing animals. Small fur-bearing animals such as otters, martens, sables, foxs and leopard cats are mainly hunted by the "I Aa 2" vertical type spring-bow. And the "I Ab 2" vertical spring-bow of "cherkan" type is used for otters, martens, sables, weasels, foxs, raccoon dogs, hares, squirrels, rats, pheasants and other small fur-bearing animals. Almost all of these are small fur-bearing animals except rats and pheasants.

Finally, I examine the archaeological bone instruments in the Okhotsk Culture. The instrument is the trigger-like one of spring-bow shown in Fig. 1-3 which is curved in form and thin. And it has a hole or a binding part at the end made of bear or fur seal's penis-bone, land-animal's rib or whale's or marine-animal's bone. Fig. 19-1~6 are found at the Kabukai-A site in Rebun island and 7~9 are from Moyoro Shell Mound in Abashiri city.

However I suspect these tools are not all the triggers of spring-bows, and so I will be happy to be of any contribution to further research of ethno-archaeology and the study of an object of Ainu manufacture by this point of view.

宇田川 洋

References

Deriha, Koji (1995) Significance of hunting small fur animals by the Ainu in Hokkaido and peoples in the northeastern Asia viewed from hunting implements. Final Report on Research Project the Historical and Cultural Exchange of the North. The Historical Museum of Hokkaido: 305-331.